

芥川龙之介的中国认识

——以《中国游记》为中心

学位论文完成日期：_____

指导教师签字：_____

答辩委员会成员签字：_____

李自明
黄英
王贵仁
何江华
徐玉琳

林增平

謝 辞

修士一年の時、私は中国教育部から派遣され、国費留学生として九州大学に一年間留学した。九大で私の世話をしてくださったチューターの河内重雄さん（現在は九州大学大学院博士後期の一年生）のご専門は芥川龍之介研究である。彼の影響によって、私は「芥川と中国」というテーマを修士論文のテーマに選んだ。当時、東京大学客員教授として在日中の指導教官林少華先生は、このテーマを認めながらも、この大きすぎるテーマを「芥川の中国認識」という一点に絞り込んだほうが良いと具体的に指導してくださった。そこで、私は、九州大学中央図書館、文学部図書館、六本松図書館で資料の収集に当たった。この時、いろいろな便宜を図ったり、協力を惜しまなかった九州大学図書館の皆様には感謝の意を表したい。

帰国後、指導教官の林先生には、授業や翻訳でご多忙中にもかかわらず、資料の収集、拙論の執筆や添削にご尽力いただいた。この熱心なご指導がなければ、いかにも完成品とは言え、この拙い論文はとてもここまで来ることはできなかったであろう。拙論の執筆中、中国海洋大学の岩下寿之先生、黄英先生、日本山形県立米沢女子短期大学の馬場重行先生、先輩の河内重雄さんから、適切なお助言や資料のご提供を受けた。特に、拙論を書き終わった後、岩下先生には丁寧に拙論の添削と部分的な改稿をしていただいた。ここに以上の先生方や河内さんには特別に謝意を表したい。また、国家図書館、北京大学図書館、北京外国語大学日本学研究センター図書館の皆様には、資料のご博搜、コピーのお手伝いなどをしていただいた。ここに特に記して、心からお礼を申し上げます。以上の先生方のご指導と友人のご協力なくしては、本稿は完成できなかったであろう。たとえ完成できたとしても、非常に拙いものとなったに相違ない。感謝の気持ちでいっぱいである。

摘 要

关于日本近代知识分子的中国认识的研究，具有十分重要的意义。因为作为日本社会精英的近代知识分子的大部分都是侵华战争的提倡者、推进者、拥护者，由于他们错误的中国认识，造成了近代中日关系史上的一系列悲剧，如甲午中日战争、九·一八事变、抗日战争等。而通过对于芥川龙之介热爱中国古代文化并蔑视近代中国现实这种矛盾的中国认识的研究，我们则可以发现其中蕴含的重大历史意义和文学意义。一方面，芥川（1892-1927）正好生活于甲午中日战争至九·一八事变之间这一中日关系史上的剧变期，通过研究这一具有代表性的知识分子的中国认识，我们可以进一步把握这一时期日本知识分子的整体性中国认识和一般国民的对华心态。另一方面，芥川一直被认为是“中国趣味”的爱好者，他和中国文化、中国文学关系十分密切，通过研究他与中国文化、中国文学的关系，我们可以深刻理解芥川文学的本质和中国文化对芥川的影响。

本文分四章阐述了芥川矛盾的中国认识的具体表现及成因。第一章首先介绍了甲午中日战争、日俄战争、二十一条、五四运动等和日本密切相关的芥川生涯中的中国社会变迁，以及当时占主导地位的脱亚论、兴亚论、侵略论的中国认识这一历史背景，然后介绍了芥川唯一的海外旅行——中国旅行的背景和足迹，在此基础上引出了芥川热爱中国古代文化并蔑视近代中国现实的矛盾的中国认识。

第二章从芥川的“中国趣味”入手，梳理了他少年时期阅读中国古代文学的读书经历，并从他在书简中关于汉诗文的评价、对于《聊斋志异》等怪异谈和雅号等的偏好中，发掘出他对于中国古代文学的关心，接着描述了他热爱中国书画、京剧等中国古代艺术的情况，具体分析了五类作品中的中国形象，以期清楚地展示他对于中国古代文化的非同寻常的造诣和热爱。

第三章首先从本文特别重视的《中国游记》中找出了蔑视现实中国的各种表现，如对于中国人的贫困、肮脏及中国落后、衰败一面的描写，对于俗恶的西洋化的厌恶，对于激变中的中国现实的漠不关心等，然后介绍了巴金等人对于《中国游记》的否定评价及批判，并结合夏目漱石的《满韩处处》，突出说明了这种矛盾的中国认识既不是芥川个人的问题，也不是一时性问题，而是明治末期至昭和初期日本知识分子的心理。

第四章主要从赛义德的东方学、尧斯的接受美学及王向远的比较文学理论、芥川的艺术至上主义的创作态度等角度，分析了芥川矛盾的中国认识的成因。根据后殖民主义理论的创始人——赛义德的东方学理论，通过对芥川的“中国趣味”之真相和二元对立思考模式的分析，我们可以看出他站在优势文化的立场上，以西方和日本的文明为基准，视近代中国为落后国家，他的一系列蔑视近代中国现实的言论给日后的侵华理论提供了根据。另一方面根据伽达默尔的文学解释学和尧斯的接受美学理论，芥川把现实中的中国理想化为汉诗文中的中国，导致了错误的期待视野和矛盾的中国认识，这在某种意义上是不可避免的。本文在承认这一文学接受事实的基础上，对于芥川不把现在的视野和过去的视野相融合，并且在以前的期待视野不适合现实中国这一“文本”时，芥川不努力创造出新的视野来认识现实中国等消极行为进行了批评。另外一个原因在于芥川是个对现实漠不关心的艺术至上主义者，所以他没有捕捉到处于激变期的近代中国的现实。

由于芥川与中国文化、中国文学关系密切，这两者之间存在着比较文学影响——接受研究所强调的事实联系，所以运用比较文学理论来研究芥川的中国认识、芥川与中国文学的关系，便具有相当的可行性。本文第一章首先介绍了芥川生涯中的中国社会变迁和脱亚论、兴亚论、侵略论的中国认识，从而勾勒出比较文学形象学所强调的“社会集体想象物”，以说明作为社会一分子的芥川必然受到了这三种中国认识所共有的中国蔑视论、日本优越论的影响。第二章运用比较文学影响研究的方法，研究了中国古代文化对芥川的深刻影响。第三章运用比较文学接受研究的方法，揭示出芥川在理想化的中国这一期待视野下对近代中国现实的接受。第四章援用了和比较文学理论密切相关的后殖民主义理论、接受美学等西方文论，探明了芥川矛盾的中国认识的成因。所以，这一研究应该纳入比较文学研究的范畴。

关键词：芥川龙之介 中国认识 中国游记 比较文学

要 旨

近代日本の知識人の中国認識、あるいは中国観についての研究は確かに多大な意味を持っていると言えよう。これは、日本社会のエリートとしての近代知識人の大部分は中国侵略戦争の提唱者、推進者、擁護者であり、彼らの誤っていた中国認識によって、中日両国人民に多大な悪影響を与えた悲劇——日清戦争、十五年戦争が起こり、近代の複雑な中日関係や現在に至る両国の間の紛らわしい歴史問題をもたらしたからである。とりわけ、芥川における中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが混同しているという矛盾した中国認識についての研究は、より大きな意味を持っているはずである。これは、中国古典文学の芥川に与えた影響、芥川文学の本質を明瞭にさせるといった文学的意義のほかに、日清戦争から満州事変までの中日関係史上の変動期に生きた芥川という一人の文人の中国認識についての研究を通じ、この時期の日本の知識人の全体的中国認識及び一般国民の対中心理を理解することに寄与できるといった歴史的意義も所有しているからにはほかならない。

こういう認識の上に立ち、本稿は四章に分けて、芥川の矛盾した中国認識の位相及びその原因についての分析を試みた。第一章では、日清戦争、日露戦争、二十一か条、五・四運動などの日本と緊密にかかわった芥川生涯中の中国社会の変遷や、当時の主導的な地位を占めた脱亜論の中国認識、興亜論（アジア主義）の中国認識、制覇論の中国認識といった中国認識の正体などの歴史背景を述べた上で、芥川の唯一の海外旅行——中国旅行の背景や足跡についての説明も加え、以上の歴史背景から生まれた近代中国の現実への蔑視と中国古典文化への親近から生まれた愛着とが混同していた芥川の矛盾な中国認識を引き出した。

第二章では、まず、芥川の「支那趣味」から着手し、「あらゆるものを本の中に学んだ」芥川の読書歴を整理し、彼の書簡における漢詩文への評価、発言や、『聊斎志異』などの怪異談、雅号などへの偏好から、芥川の並々ならぬ中国古典文学への関心を明らかにし、さらに、中国書画、京劇などの中国古代芸術への愛好、五種類に分類される芥川文学の中の中国像を総括し、芥川の中国

古典における高い造詣と愛着を明らかにした。

第三章では、まず、本稿では重大視される『支那遊記』の成立と内容——中国人の貧困、不潔と中国の遅れた光景や「俗悪」な西洋化への嫌悪、動きつつある中国の現実への無関心——などを主軸に据え、そこから、中国の現実への関心が薄く、興味本位に走る傾向は強いといった従来の否定的評価と巴金などの中国人の反発、批判を記し、また、「南京の基督」、「湖南の扇」などの作品の中の中国批判を追加し、芥川の近代中国の現実への蔑視や誤解、無関心を抽出した。この上に、漱石の『満韓ところどころ』の中の中国蔑視と関連させ、中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが交じっているという矛盾した中国認識は、芥川の個人的問題でもなければ、一時的な問題でもなく、明治末期から昭和初期にかけての日本の知識人の共通心理であることを示した。

第四章では、主にサイードのオリエンタリズム、ヤウスの受容美学と王向遠の比較文学などの理論、芸術至上主義の創作姿勢といった視点から、芥川の全生涯を貫いた矛盾した中国認識の原因を探求してみた。ポストコロニアリズムの元祖と言われるサイードのオリエンタリズムを取り入れ、エキゾチシズムとしての芥川の「支那趣味」の正体と芥川の二元対立的思考様式についての分析をした上で、芥川は優位文化の立場から、西洋及び日本の文明を基準として、中国を「遅れた」国と見なし、その一連の中国蔑視の発言からなる日本優越論が以後の中国侵略にある程度の理論的根拠を与えたということを明らかにし、本研究の歴史的意義を強調した。一方、ガダマーの文学解釈学やヤウスの受容美学を取り上げ、芥川が現実の中国を漢詩文の中の中国と理想化した、誤った先入観や期待の地平を持ち、矛盾した中国認識を所有したのは、ある意味では避けられないことであるということを認めつつも、現在の地平と過去の地平とを融合させなかったことや、以前の期待の地平が現実の中国という「テキスト」に合致しない時、新しい地平を作ることによって、現実の中国を認識しようと努力しなかったことを批判した。これらのほかに、読書による人生体験を志した芥川が現実に対しては無関心であったという彼の芸術至上主義の創作姿勢から、彼は中国の現実への関心が薄く、激動する近代中国の現実を捉えられなかったということを記した。

本稿を執筆する際、基本指針としての比較文学の視座を常に念頭に置いた。これは、芥川が中国文化、中国文学と密接にかかわり、この両者の間に比較文学影響—受容研究が重視する事実関連があるからである。第一章では、芥川生涯中の中国社会の変遷や三種類の典型的な中国認識を述べ、比較文学形象学が重んじる〈社会全体のイメージ〉を描き出した。第二章では、比較文学影響研究の方法で、中国古代文化の芥川に与えた深い影響を明らかにした。第三章では、比較文学受容研究の方法で、理想的な中国像という期待の地平のもとで、芥川の近代中国の現実への受容を分析した。第四章では、比較文学理論と密接にかかわるポストコロニアリズム、受容美学などの西洋文芸理論を援用し、芥川の矛盾した中国認識の原因を究明してみた。したがって、この研究は比較文学研究の具体例として成り立つ。

キーワード：芥川龍之介、中国認識、支那遊記、比較文学

目 次

0 はじめに	1
1 芥川生涯中の中国社会の変遷と中国認識	4
1、1 日本とかかわった中国社会の変遷	4
1、2 当時の日本人の中国認識	8
1、3 芥川の中国旅行と中国認識	13
2 芥川の中国古典文化への愛着	18
2、1 中国古典文学との出会い	18
2、2 中国古代芸術への関心	24
2、3 作品中の中国像	27
3 芥川の近代中国の現実への蔑視	31
3、1 『支那遊記』の中の中国像	31
3、2 『支那遊記』に対する従来の評価と中国人の反発	37
3、3 他の作品の中の中国蔑視	40
3、4 漱石との関連	42
4 矛盾した中国認識の他の原因	44
4、1 オリエンタリズムの視点から	44
4、2 受容美学と比較文学の視点から	49
4、3 芸術至上主義の創作姿勢から	54
5 おわりに	58
注釈	61
参考文献	64

0 はじめに

「近代日本の歴史は、中国認識失敗の歴史であった」。野村浩一の「大陸問題のイメージと実態」(『近代日本政治思想史 II』、有斐閣、昭和 47 年 2 月 20 日、初版 3 刷) のこういう書き出しに、私は心を打たれた。少なくとも、明治維新から敗戦にかけての歴史にとって、これは、極めて至当な指摘であると思う。近代日本の歴史を研究する場合、中国認識は、日本近代史に密接した不可欠の問題である。この間の日本は、国内では、殖産興業の政策を取り、国外では、富国強兵の政策によって、東アジア、東南アジアへの侵略に全力を注ぎ、広い植民地と資源、財産を獲得し、一時、世界でも誇れる「大日本帝国」の繁栄を築いたが、中国をはじめとする植民地人民の跡絶たない反抗とアメリカの空襲によって、結局、日本は敗戦を迎え、東京などの大都市が焼け野原になり、日本国民の八十年近くの実績は、灰燼に帰してしまった。戦後の日本は、「貿易立国」、「技術立国」の政策を立て、再び経済復興を実現し、世界で第二の経済大国に成長した。この前後正反対の史実から、私たちが言えるのは、中国などのアジア国々を侵略、制覇することにより、日本国力の増長を謀る認識は、まったく誤っている失敗の認識にほかならなかったということである。

王向遠の研究によれば、「明治維新後、より早く中国侵略の構想を表し、あるいは、中国侵略のために根拠をつけたのは、在野の一部の文人と作家である。彼らの思想は、北一輝、大川周明などの現代ファシズム理論家の重要な思想源流の一つである。中国侵略戦争を全面発動した時期、日本文壇のより多くの人々は軍国主義の中国侵略国策の参謀と宣伝者になってしまった。彼らが出した中国侵略の思想と主張は、日本軍国主義の形成と中国侵略の実行において、無視できない役割を果たした。」① (『筆部隊和侵华战争』、北京师范大学出版社、1999 年 7 月初版) 佐藤春夫は、まさにその典型の一人と言わざるを得ない。彼は、満州事変の前に、二度②中国に渡り、郁達夫、田漢、郭沫若などの中国文学者と親交を結び、常に「支那趣味の愛好者と中国の友人」と自己標榜した。にもかかわらず、日中戦争が始まった後、直ちに文学報国会に加入し、『亜細亜の子』を発表し、日本の侵略戦争を粉飾した。郁達夫はこの作品を読んだ後、腹が立ち、「日本娼婦と文士」(1938 年 5 月)によって、彼を強く批判し

た。③

だから、近代日本文学者の中国認識についての研究は、この侵略の史実真相を究明し、また、その中国認識を通じて彼らの文学の本質に迫る上において、大きな意義があると思われる。近年來、日本の一部の右翼政治家と知識人は、過去の侵略戦争を否認し、「皇国史観」を主張し、「大東亜共栄圏」についての弁護を繰り返している。これも、誤った中国認識の一つの明らかな表れであり、と同時に、日本知識人の誤った中国認識を批判し、正しい中国認識を打ち立てる必要性和現実的意義を物語っている現象だと言えよう。

近代日本文学者と知識人の中国認識についての研究は、確かに、文学研究の面においても、現実の面においても、多大な意義を持っているが、なぜ、芥川の中国認識が問題にされなければならないのか。これは、日本においても、中国においても、芥川がかなり大きな存在であるからにはほかならない。「芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られて居る」。(大正十年三月三十一日付の『大阪毎日新聞』)これは、大正文学の代表者としての芥川の日本近代文壇における位置を表しているとともに、芥川文学と中国文学との密接な関係をも明らかにしている。

一方、中国でも、芥川も普通の存在ではない。1921年に、魯迅が最も早く芥川の「鼻」、「羅生門」を翻訳してから、芥川作品は絶えず中国で翻訳されてきた。特に、1927年に芥川が自殺した後、中国文壇では、芥川ブームが起こり、当時ではかなり有名な文芸誌『小説月報』に「芥川龍之介特集」も掲載され、より多くの作品が中国に紹介されてきた。実藤恵秀の調査によれば、二三十年代、中国で翻訳された日本作家の中で、作品の量から言えば、芥川は第二位を占めた。④(《中国人留学日本史》、譚汝謙、林启修译、北京三联书店、1983年)陸耀東が1926年から1945年8月までの中国の二百種余りの雑誌を調査した結果から分かるのは、紹介された216人の日本作家の中で、訳された芥川作品や彼についての評論は、最も多く26篇もあるのに対して、彼の恩師である夏目漱石の作品は、第三位にとどまり、16篇だけである。(《昭和前期日本文学在中国》、鄂州大学学报、1998年第4期)この二つの調査のどちらが正しいかは別にして、両方とも中国における芥川文学の地位を示すことができると思われる。また、芥川は文壇にデビューした頃から、中国文化に深く関

心を持ち、中国古典に取材した中国物、あるいは現代中国を舞台にした小説など、いわゆる中国題材作品を多く発表した。李秀卿の調査によれば、このような作品は、12篇の小説、3篇の童話、4篇の小品と『支那遊記』のほかに、中国旅行中の数句の俳句や二十首あまりの漢詩、8篇の未定稿からなり、芥川の全作品中で独立した存在として、大きな意味を持っている。(《想象中国古典，抒写人生理想——论芥川龙之介的中国题材作品群》、西昌师范专科学校学报 2004 年第 2 期)

上述したように、芥川の中国認識についての研究は、多大な意義を持っている。芥川がちょうど日清戦争から満洲事変にかけての中日関係史上の激動期に生きていたから、彼の中国認識は、一種の典型として、ある種の普遍的中国認識のありようを表している。従って、芥川の中国認識についての研究を通じ、この激動期の日本文学者ないし日本知識人の中国認識を考察することは、日中戦争が始まる前の一般国民の心理状態を把握することに大いに役立ち、また芥川文学の本質を深く理解し、中国文化が芥川に与えた影響を探求する上において、無視できない役割を担っていると思われる。

ところが、この問題についての先行研究が極めて少ないのが現状である。日本の芥川研究は進んでおり、研究資料が漢牛充棟と言ってもいいほど膨大な量に達している。例えば、国文学研究資料館の国文学研究文献目録というデータベースに「羅生門」というキーワードを入力すると、200 篇以上の論文が出てくる。外国文学及び外国作家との比較文学研究の面でも、西洋文学との比較文学研究は最も多く、大多数を占めるのに対して、中国文学との比較研究は、やはり極く少数にとどまる。「酒虫」のような中国物と中国原典との比較研究は、近年来、中日両国間で盛んに行われているが、遺憾なことに、芥川の中国認識についての言及は、ほとんどない。管見に入る限り、この問題についての研究は以下のものにとどまる。前述した野村浩一の「大陸問題のイメージと実態」の中に、王向遠の《笔部队和侵华战争》の中に、この問題についての言及が少しある。このほかに、孟慶枢の《芥川龙之介与中国文学》(东北师范大学学报、1996 年第 1 期)と北条常久の「芥川龍之介と中国」(『日本文芸論叢』、笠間書院、1976 年)の二篇の論文の中に、この問題についての論及も一部あった。

確かに、「芥川は、中国物執筆の結果として独立した中国観なり中国論を発

表してはいない。」（北条常久、同前掲）そのためか、日本の研究者は、芥川の中国認識をまとめたものとしては捉えていないようである。ここに、私は未熟ながら、中国文化から受けた影響、中国問題についての直接的発言、間接的な流露を芥川の中国認識として考察してみたい。本稿においては、特に『支那遊記』と中国旅行⑤を問題視することにする。なぜかという、中国旅行は芥川の創作にも、身心にも、多大な影響を与えたからである。中国旅行の前に、芥川は作品の中でも、実生活の中でも、中国及び中国文化にある程度の好感や憧憬を持っているが、中国旅行から帰ってから、この親しみが薄くなり、中国への蔑視が著しくなっていて、芥川の中国認識に、ある変化が生じた。ここで留意してほしいのは、この変化がそれほど顕著な、根本的なものではないということである。つまり、中国旅行の前に、芥川は中国及び中国文化にある程度の蔑視や誤解も持っているが、中国から帰った後、中国文化に好感や親しみを全部失ってしまったわけではない。中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが交じっているという中国認識は、芥川の全生涯を貫いていたのである。

私は、芥川全集を中心に調査し、先学の研究成果を汲み取り、また、それに分析を加え、芥川の中国古典文化への愛着と中国現実への蔑視とが交じっているという矛盾した中国認識の複雑な様相を整理してみたい。さらに、オリエンタリズム、受容美学、芸術至上主義の創作姿勢などの視点から、その原因を探求することにする。

1 芥川生涯中の中国社会の変遷と中国認識

1、1 日本とかかわった中国社会変遷

中国の近現代史は、日本を除外すれば考えられないのは言うまでもない。特に、明治維新から第二次世界大戦の終戦まで、日本は、日清戦争と日中戦争とを起こし、当時の中国に致命的悪影響を及ぼし、中国にとって、中国近現代史を変えた最も直接的で、大きな存在である。芥川は、ちょうど日清戦争と満州事変との間に生きて活躍した。芥川の中国認識という課題を深く掘るには、この間の動きつつあった中日関係史を整理し、日本と深くかかわった中国社会の歩みをたどる必要がある。1892年3月1日から1927年7月24日までの僅か

三十五年間の芥川生涯中、日本とかかわった中国社会の変遷は、主に日清戦争、北清事変、日露戦争、二十一カ条、五・四運動、五・三〇運動からなっている。以下、簡単にこの歴史の流れをたどってみよう。

明治維新後、まもなく、明治政府は、琉球の漁民が台湾に漂着し、台湾の原住民に殺された事件を問題にし、1874年に台湾出兵を行った。結局、清政府は日本政府と交渉した上で、五十万両の賠償金を支払い、大きな衝突は起きなかった。

中日両国間の真正面の衝突は、やはり日清戦争から始まった。芥川が生まれて二年後のことである。日清戦争（中国では、甲午中日戦争と呼ぶ）は、1894年7月25日に日清両国の軍隊が戦闘を開始し、翌年5月8日に講和条約が発効するまで続いた。日清戦争が起こった要因は、日清両国間の朝鮮における利権争いの深刻化にあった。当時、日本は朝鮮侵略政策を取り、朝鮮の宗主国である清国と利益が衝突した。1894年春から、朝鮮では甲午農民戦争（東学党の乱）が起こり、朝鮮政府は清に出兵を要請し、日本も在朝鮮日本人を保護するという名目で出兵した。日本は、日本が単独で朝鮮を改革することを主張して清を挑発し、開戦を図ろうとした。戦争は豊島沖海戦に始まり、平壤陥落、黄海海戦を経て、日本軍は圧倒的勝利をおさめ、10月下旬に鴨緑江を渡り、遼東半島に上陸し、遼東半島と山東半島を占領し、北京、天津に迫った。腐敗した清政府は、いくたびかの敗戦により、講和を急ぎ、翌年4月17日に、下関での講和会議で、中国でいうところの馬関条約⑥が締結された。

この条約の主な内容は、次のようなものであった。①清は朝鮮の独立を承認する。②清は遼東半島、台湾、澎湖諸島を日本に割譲する。③清は賠償金二億両（約三億円）を支払う。④清は沙市、重慶、蘇州、杭州を開港し、日本は、開港地で工場を建設できる。⑤日本は、欧米諸国と同様の最恵国待遇を享受できる。しかし、ロシア、フランス、ドイツは、中国における日本の利権の拡大を恐れ、いわゆる三国干渉を行った。日本は、さらに、三千万両の賠償金をもらうかわりに、遼東半島を清国に返還した。

日本にとって、日清戦争の勝利は、中国への圧倒的優位と帝国主義列強の仲間入りを意味する。この時期から、中国蔑視の風潮は、政府から民間に及び、日本人の中国認識の主流をなした。一方、清国はさらに衰え、植民地化が急速

に進んだ。

日清戦争の敗北で弱体ぶりを見せた清国に、列強はさらに積極的に進出した。列強の中国に対する安価な商品の輸出の急増により、中国は、ますます深く資本主義の世界市場にまき込まれるようになり、中国国民の生活も、次第に窮地に陥った。列強の進出に対して、中国国民の間には排外運動がさかんとなり、「扶清滅洋」を唱えた義和団はその主流を占めていた。1900年に、義和団が北京の各国公使館を包囲したので、日本を主力とする八カ国連合軍は、北京、天津を占領し、これを鎮圧した。日本は[東洋の憲兵]として、八カ国連合軍の中でも重要な役割を占めた。これは日本では「北清事変」と呼ばれ、中国では「義和団事件」と呼ばれる。結局、清政府は屈服し、列強と辛丑条約を結び、各国に四億五千万両の賠償金を支払い、各国軍隊の華北における駐兵権をはじめとする多くの権利を認めた。これにより、清国の植民地化がさらに進んだ。

北清事変をきっかけに、ロシアは満州を事実上占領し、満州に進出しようとする日本と対立した。かつて、三国干渉後、日本国民はこれを大きな屈辱とし「臥薪嘗胆」を唱え、ロシアに対抗する気運が高まった。そのため、日本とロシアの間の利権争いはますます著しくなった。日本は、軍備拡張をした上で、さらにイギリス、アメリカ両国の支持を得、遂に1904年2月に開戦に踏み切った。日本は、ロシアの根拠地旅順を陥落させ、ついで奉天を占領し、日本海海戦によって、決定的勝利を収めた。やがてアメリカ大統領の斡旋で、1905年9月に、ポーツマス条約が調印された。その結果、ロシアは、韓国に対する日本の指導権を全面的に認め、清国領土内の旅順、大連の租借権、長春以南の鉄道と付属権利を日本に譲渡し、さらに、北緯50度以南の樺太と付属の諸島の譲渡、沿海州とカムチャツカの漁業権を日本に認めた。

この戦争は、日本がロシアと朝鮮や中国の東北地区(満州)を争うために、中国国内で展開された帝国主義列強間の戦争である。むろん、中国の東北地区に多大な損害を与えた。その後、日本は、南満州鉄道株式会社(満鉄)を設立し、関東軍を駐留させ、南満州の経営を進めた。その結果、日本は、中国の農産物や鉱物資源を略奪するばかりでなく、軍隊を増強し、南満州に対する統制を強化し、以後の満州事変のための基礎を築いた。日本の中国への侵略は、いっそう激しくなった。

日露戦争後の腐敗した清政府は、さらに弱体化し、ようやく 1911 年に孫文が指導した辛亥革命によって打倒され、中国の二千年余りに及ぶ封建君主専制も終結された。しかし、革命勢力の未熟に乗じた軍閥の袁世凱は、帝国主義の支持のもとで、清朝皇帝を退位させ、孫文から民国の政権を受け継ぎ、中華民国の初代大統領となった。袁世凱は、孫文との約束を守らず、列強に媚びて独裁専制を開始し、混乱が始まった。

南満州におけるロシヤの権益を継承した日本は、第一次世界大戦の際、日英同盟を理由にドイツに宣戦し、ドイツの根拠地青島を占領した。さらに 1915 年 1 月に、袁世凱政府に二十一ヶ条の要求を提出し、5 月に承認させた。この二十一ヶ条の要求は、中国の滅亡を企む、非常に苛酷なものであり、日本はより多くの権益を獲得した。袁世凱のこの売国的行為は、中国人民の猛烈な反対を引き起こし、中国国内の反日運動の高まりを招いた。

第一次世界大戦の終戦後、パリ講和会議が開かれた。中国では、大戦中に日本が獲得した山東半島における権益の回収を要求する国民的運動が起こった。この正義に基づく要求が講和会議で拒絶されると、中国人民の長い間にわたって蓄積された愛国の熱情は、瞬く間に火山のように吹き出した。

1919 年 5 月 4 日に、北京の大学生三千人あまりは、日本の中国侵略に抗議し、日本公使館へ向かい、「青島を返還せよ」、「二十一ヶ条を取り消せ」などの主張を書き付けた旗を掲げてデモ行進した。やがて、この運動は、野火が草原を焼き尽くすように全国に広がった。これは、いわゆる五・四愛国運動と呼ばれている。

この後、中国知識人が主導した新文化運動の展開と労働運動の興隆のもとで、中国共産党が、1921 年 7 月 1 日に上海で創立された。これは、芥川が中国を訪問中のことである。中国共産党は、1924 年に、孫文が率いた国民党と協力し、帝国主義列強と密接に結んだ北洋軍閥に対抗しようと努めた。このさなか、1925 年 5 月 30 日に、日本資本家が上海の紡績工場で共産党員である労働者顧正紅を銃殺したことをきっかけに、反日運動はいつそう高まった。これが日本帝国主義と関係した五・三〇運動である。この反帝国主義運動の風潮に乗り、中国国民党は、共産党との協調のもとで、1926 年に北洋軍閥の討伐を開始し、芥川が自殺した後も続いた。

以上述べてきたように、芥川生涯中の中国の歴史は、日本と深くかかわり、侵略とそれに対する反抗の闘争の中で、激しく展開された。

1、2 当時の日本人の中国認識

明治維新から敗戦までの日本人の中国認識は、非常に紛らわしくて難しい課題と言わざるをえない。啓蒙主義者、自由民権論者、国家主義者、民本主義者、社会主義者、超国家主義者などの各派の政治家も思想家も、自分なりの中国認識、あるいは中国観を主張し、さまざまな位相を呈していた。この課題についての先行研究には、严绍汤《二十世纪日本人的中国观》（岱宗学刊、1999 年第 2 期）、陈秀武著《日本大正时期政治思潮与知识分子研究》（中国社会科学出版社、2004 年 4 月初版）、野村浩一「大陸問題のイメージと実態」（同前掲）などがある。

日本人の中国認識、あるいは中国観とは、「一定の歴史段階の中で、日本社会における主導的地位を占める中国に対するある種の相対的に安定したイデオロギーであり、すなわち、中国を観察する際の内面に潜んでいる心理状態、中国の実際的事態に対する内在的な判定、中国にある行動を取る時の衝動と動機」ということである。^⑦（严绍汤《二十世纪日本人的中国观》）この時代の中国認識を大別すれば、代表的な三種類の中国認識が浮かび上がってくる。つまり、脱亜論の中国認識、興亜論あるいはアジア主義の中国認識、制覇論の中国認識ということである。以下にそれぞれを分析し、その本質と芥川に対する影響を見出そうと思う。

「明治以降で、日本がアジア大陸からの精神的影響を離脱しなければならないことを最も早く力説したものは、福沢諭吉の有名な『脱亜論』（1885 年）である。」（田中美知太郎編、『思想の歴史 12・二十世紀アジアの展開』、平凡社、昭和 41 年 3 月 25 日初版）福沢諭吉の「脱亜論」は余りにも有名で、脱亜論の中国認識のもとになった。しかし、福沢がこの「脱亜論」にたどりつくまでには、やはりいくつかの段階があった。

まず、彼がこれを著す前の思想の変化を述べてみたい。福沢は、日本近代史上最大の啓蒙主義思想家として歴史の舞台に登場し、『学問のすすめ』と『文明論之概略』を発表し、江戸時代の支配的イデオロギーとしての儒教への猛烈

な批判から出発し、人間平等と国家独立を提唱した。その後、優勝劣敗論の文明史観を学び、啓蒙主義と訣別し、「方今東洋の列国にして、文明の中心と為り他の魁を為して西洋諸国に当たるものは、日本国民に非ずして誰ぞや、亜細亜東方の保護は我責任なり」⑧（『時事小言』1881年9月）と、日本のアジア盟主論を主張していた。その後、福沢は、甲申政変⑨の失敗でアジアの開化の前途に絶望した時、未開のアジアの開明を待つ余裕はないとし、日本はむしろ、欧米と行動をともにすべきだという脱亜論を主張した。

以下に「脱亜論」の重要な段落を引用し、その実態を明らかにしようと思う。

「国中朝野の別なく一切万事西洋近時の文明を採り、ひとり日本の旧套を脱したるのみならず、アジア全洲の中に在って新たに一機軸を出し、主義とするところはただ脱亜の二字に在るのみ。（略）しかるにここに不幸なるは近隣に国あり、一を支那といい、一を朝鮮という。（略）この両国の者どもは一身につきまた一国に関して改進の道をしらず、（略）その古風旧慣に恋々するの情は百千年の古に異ならず、この文明日新の活劇場に教育の事を論ずれば儒教主義といい、学校の教育は仁義礼智と称し、一より十に至るまで外見の虚飾のみを事として、その実際においては真理原則の知見なきのみか、道德さえ地を払うて殘刻不廉恥を極め、なお傲然として自省の念なき者のごとし。（略）我が国は隣国の開明を待つて共にアジアを興すの猶予あるべからず、むしろその伍を脱して西洋の文明国と進退を共にし、その支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、正に西洋人がこれに接するの風に従つて処分すべきのみ。悪友を親しむ者は共に悪名を免れるべからず。われは心においてアジア東方の悪友を謝絶するものなり。」⑩

以上の論述から分かるのは、福沢の議論の前提となっているのは、抵抗しがたい歴史の流れとしての「文明東漸」だということである。福沢は、文明を野蛮、半開、文明という必然的な三段階に区分し、欧米諸国を文明国と見なし、中国と朝鮮を未開、半開の国と規定し、それゆえに、日本が欧米諸国に伍していくべきことを主張し、中国と朝鮮を強く批判した。しかし、その後、福沢は積極的に日本の對外拡張を支持するようになり、日清戦争の日本圧勝を「官民一致」による勝利、文明対野蛮の勝利と思い込んだ。脱亜論の中国認識は、日本近代化初期の欧米を師とする思潮の結果として生まれ、最初は主に社会文化の面に

とどまり、のちに、国権拡張を求める政治、軍事の欲求と密接につながり、中国侵略を加速させた。

脱亜論の中国認識にひきかえ、興亜論あるいはアジア主義の中国認識も早く発生した。明治十年代には、民権論者の間で、日本がアジア諸国と連携して西洋列強のアジア進出に対抗すべきことが唱えられていた。それ以来、この思潮は、ますますさかんになり、日清、日露、日韓併合と進んできた日本の大陸進出の中で、いろいろな様相を呈し、さまざまに変貌しつつあった。だから、竹内好は自編の『現代日本思想大系 9・アジア主義』（同前掲）の序文の中で、「アジア主義は特殊的であり、おそろしく多義的でもある。（略）アジア主義の定義は非常にまちまちである」と述べた。

それにもかかわらず、私はここに、敢えて竹内好氏の考えに比較的に近い説明（平凡社の『アジア歴史事典』の「大アジア主義」の項目）を引用しておきたい。「欧米列強のアジア侵略に抵抗するために、アジア諸民族は日本を盟主として団結せよ、という主張。アジア連帯論自体は、日本の独立問題と関連して、明治の初年から唱えられたが、とりわけ、自由民権論者の主張のなかで、いろいろな差異を示しながら展開された。たとえば、植木枝盛は、彼の民権論をささえていた自由平等の原理を、国際関係にまで適用して、アジア諸民族の抵抗を正当化するとともに、その抵抗のためにアジア諸民族がまったく平等な立場で連帯しなければならないといい、さらにその立場をおしすすめて一種のユートピア的な世界政府論をかかげるにいたった。しかし、いっそう有力であったのは、樽井藤吉や大井憲太郎の主張であった。彼らは、欧米列強に対抗するために、アジア諸国が、それぞれ国内の民主化を推進しながら、あい連合する必要があるとみなしたが、日本は、民主化の点で一步先んじているから、他のアジア諸国の民主化のために援助の手をさしのべねばならないとして、日本の民族的使命なるものを強調した。やがて、明治二十年代にはいると、こうした民権論者のアジア連帯論から、自由民権運動の後退、天皇制国家機構の確立、対清軍備の拡張などにつれて、大アジア主義が頭をもたげてきた。『有色人種として欧米人に対抗するには軍国の設備が必要であり、ことに東洋の新興国として勃興せる我が国が、将来東洋の盟主たらんと希望を抱蔵する時代において、軍国主義の首唱は最も時をえたり』として、玄洋社が民権論をすてて、国

権主義への転向を表明したのは、まさに一八八七年であった。かくて、大アジア主義も、日本が同じ被圧迫民族であるかのように主張したり、同文同種といった題目をならべたり、東洋文明は精神的で西洋文明は物質的であると称したりして、アジア諸民族との連帯を訴えたが、実はしだいに明治政府の大陸侵略政策を隠蔽する役割を果たすようになった。一九〇〇年設立の黒龍会の綱領にみられるように、その後大アジア主義は、天皇主義とともに、多くの右翼団体の主要な標語にえられ、満蒙奪取を企図する日本の政策に奉仕した。」（前掲序文から引用した）

少し長くなるが、この説明は、アジア主義を主張する主要人物の理論とこの主義の変容ぶりを明白にさせ、至当なものだと言えよう。『東洋の気運』を書いた勝海舟であれ、『大東合邦論』を書いた樽井藤吉であれ、大阪事件を起こした大井憲太郎であれ、玄洋社の頭山満であれ、黒龍会の内田良平であれ、東亜同文書院の荒尾精であれ、彼らの具体的な主張は確かにそれぞれ異なっているが、共通しているのは、日本がアジアの中での文明国であるから、アジア諸国が日本を盟主とすべきだという日本優越論、日本盟主論、日本責任論である。これらのみでなく、「アジアは一つなり」と説き、西洋文明に対抗し、東洋文化の価値を主張する岡倉天心でさえ、複雑なアジア文明の確実な統一を実現するのは日本の偉大な特権であると唱え、日本優越論と日本使命論が彼の内心に影を落としていた。有名な中国学者内藤湖南も、中国の国防と独立を否定し、日本国民の中国経済界への進出が「支那人も日本人もまだ自覚して居らぬ一種の使命」とすると自ら規定した。そして、「この大きな使命からいへば、日本の支那に対する侵略主義とか、軍国主義とかいふ様な事の議論は、全く問題にならない」（『新支那論』1924年、野村浩一の前掲論文から引用した）と続いて述べた。

それゆえに、日本のアジア進出を正当化しようとするアジア主義者がたえず批判を浴びせられるのは無理もない。1917年に李大釗は、「大亜細亜主義」を書き、「大亜細亜主義の旗を借り、それを以って帝国主義を粉飾し、極東の覇権を獲得しよう」というアジア主義の真相を暴いた。1919年に彼は、また、「大亜細亜主義と新亜細亜主義」を発表し、大亜細亜主義を中国侵略の隠語として排斥し、「この『大亜細亜主義』は平和の主義ではなく、侵略の主義であり、

民族自決主義ではなく、弱小民族を併呑する帝国主義であり、アジアの民主主義ではなく、日本の軍国主義である」⑪と鋭く批判した。このほか、孫文もアジア主義を批判した。

前述のように、福沢諭吉もアジア主義者もほとんど中国侵略を支持するようになり、制覇論の中国認識を所有するようにならされた。実は、幕末から維新後にかけて、対外拡張、海外雄飛の思想がすでにあつた。1862年5月に千歳丸に乗って上海に渡った高杉晋作が書いた『遊清五録』、『上海雜記』は、はじめて大部分の日本知識人が抱いていた中国に対するあこがれを壊し、次第に日本人に内心で中国蔑視の意識を発生させた。吉田松陰も、「朝鮮を責めて、質を納れ、貢を奉ずること古の盛時のごとくならしめ、北は満州の地を割き、南は台湾、呂宋諸島を収め、進取の勢を示すべき」⑫（『東亜先覚志士紀伝』上巻、黒龍会、1933年）という大陸経略を提出した。

日清戦争が起こると、福沢をはじめとする多くの識者がこの戦争を支持した。内村鑑三も、日中関係を「新文明を代表する小国」と「旧文明を代表する大国」との関係にし、この戦争が「義戦」であることを世界に対して主張した。この戦争の勝利によって、日本人の中国認識は大きく変化し、特に中国への蔑視観が一般的に定着してしまった。ついで、三国干渉とその後の列強の中国分割は、日本人に衝撃を与えた。高山樗牛や徳富蘇峰らは、海外への膨張論などを唱えるようになった。かつて民友社を設立して「国民之友」を発行し、平民主義を説いた徳富蘇峰は、日清戦争をきっかけに国家主義者に豹変し、『大日本膨張論』（1894年）によって、中国への敵意を表した。次に引用するのはその本の一節である。「我が国民が世界の各所に膨張するに際し、その大敵となるべきは白色人種ではなくて、支那人種であるのを忘れてはいけない。（略）もしその面積において我等の十五倍、その人口のにおいて我等の十倍の清国に打ち勝てば、祖先の名を上げ、子孫に名誉を残し、世界に向かって、永く我が地歩を占めることができるだけでなく、また永く我が地歩を占める自信力を強めることができるだろう。」（中島嶺雄編著、『近現代史のなかの日本と中国』、東京書籍、1992年11月8日第一刷）この膨張論はやがて後藤新平の『日本膨張論』（1916年）へと展開した。

かつてアジア主義者として出発した、黒龍会の主幹として有名な内田良平は、

1913年に『支那観』を発表した。『劣悪な国民性』と『畸形国・支那』という軸によって構成される「内田の『支那観』は、日本の侵略的膨張主義の最右翼を代表すると同時に、(略)日本帝国の中国侵出というコースを最も突出した形で表現するものでもあったと言えよう。」(野村浩一、同前掲)民本主義を提唱した吉野作造でさえ、二十一か条を肯定し、その要求が「皮相的にみれば、或は支那の主権を侵略し……たやうな点もあるが、帝国の立場からみれば、大体に於て最少限の要求で」あり、「且又西洋諸国との関係からみても、頗る好適の時機を選んだものであって、支那に対する帝国将来の地歩を進むる上から見て、極めて機宜に適した処置であった」(同上)と述べ、さらに中国の山東返還を拒否すべきだと提言した。以後、制覇論の中国認識は、北一輝、大川周明のような超国家主義者のファシズム理論につながり、展開されていた。

したがって、「近代の日中関係は、いうまでもなく日本帝国主義の中国侵略という一語によって表現される。それは、敗戦に至るまで、ありとあらゆる中国問題を規定した強力な一つの磁場であった。」(同上) 嚴紹湯はさらにこの三つの中国認識の関係と本質を見抜いていた。「要するに、戦前50年間、日本人の中国観は、脱亜論と興亜論に始まり、その中心をなすものがみな日本優越論をもとにする中国蔑視論にあり、そして、大東亜中国観、つまり、日本のアジアにおける覇権をもとにする中国滅亡論に終結した。」^⑬この三つの中国認識が中国への対応という点で、拒絶、連帯、制覇という異なった形で表れたのは、各論者の歴史観、文明観、国家観を反映したものと言える。彼らがどんな政策を取っても、この三つの中国認識の底流をなす根本的に共通しているのは、遅れた中国への蔑視観と文明国と自任する優越感というものであろう。

芥川は、この激動しつつあった中日関係史の中に生き、共通点を持っているこの三種類の中国認識に囲まれていたので、彼らの影響を少しも受けなかったとは考えられない。これは、人間は社会的動物であり、真空の中に住んでいるわけではなく、動きつつある歴史と社会関係の中に身を置き、たえず他人、あるいは他国から何らかの影響を受けざるをえないからである。この観点を念頭に置きながら、芥川の中国認識を探っていこう。

1、3 芥川の中国旅行と中国認識

大正十年（1921年）三月十九日、芥川は大阪毎日新聞社の海外視察員として東京を発ち、中国旅行に出発した。以前から芥川は中国に深い関心を持ち、中国旅行を望んでいたように思われる。これは、「南京の基督」、「杜子春」、「秋山図」などのような中国旅行前に発表された中国題材作品から、その関心ぶりを察することができる。そこで、中国旅行は芥川が長年希望していた念願の旅行だと言えよう。関口安義の研究によると、芥川がはじめて中国行きを意識するのは大正七年（1918年）である。これは府立三中時代の旧友で、中国滞在中の西村貞吉宛の書簡⑭（11月20日付）からその一斑を察することができよう。大正八年（1919年）に大阪毎日新聞社に入社してまもなく、芥川は新聞社学芸部の薄田淳介に書簡⑮（7月30日付）を送り、中国旅行を計画していたようである。翌九年春の南部修太郎宛書簡（5月9日付）に、「君の支那旅行の経費算用の綿密なのには敬服したなる可く都合していっしょに行き給へボクも貧乏旅行をする心算だから」とあり、中国旅行を決行するつもりだったことが垣間見られる。翌十年（1921年）中村武羅夫宛（2月25日付）の書簡⑯から見れば、中国旅行はおそらく急に決まったのだろう。（以上は関口安義「中国旅行—芥川龍之介の道程（九）—」を参考した）

さて、芥川の中国旅行の背景はいったいどういうものであったか。邱雅芬は、「もちろん、中国文学に対する教養や中国趣味は芥川の中国行きの最も根本的な背景になろうけれども、大正十年前後の文壇の動きも芥川の中国行きを促しただろう。」（「芥川龍之介の中国旅行の背景」、『現代社会文化研究』、第5号）と書き、「中国文学に対する教養や中国趣味」、谷崎潤一郎や佐藤春夫の中国旅行の刺激、「自ら感じた創作の行き詰まりを打開する意図」、大阪毎日新聞社の期待という四つの背景を挙げた。私はこれらが的確な指摘だと思い、本稿において、これらの見方に従う。「中国文学に対する教養や中国趣味」についての説明は本稿の第二章に譲り、ほかの三つの背景について、少し触れてみよう。谷崎も佐藤も芥川の自殺まで二回も中国を訪問したが⑰、ここでは、みな一回目の中国旅行、つまり、芥川訪中前の旅行を取り上げる。谷崎は大正七年十一月上旬から、朝鮮、満州、天津、北京、漢口、九江、江蘇、浙江地方を旅し、十二月末上海から神戸に帰国した。佐藤春夫も大正九年の六月下旬より、台湾

在住の旧友に誘われ、主に台湾と福建省をめぐる。二人とも帰国後、中国関連の作品を発表した。特に、谷崎は翌大正八年、九年、十年と続いて発表し、頗る旺盛な創作力を発揮し、「秦淮の夜」（『中外日報』大正八年二月）、「南京奇望街」（『新小説』大正八年三月）、「天鵲絨の夢」（『大阪毎日』大正八年十二月）などの優秀な作品を続出させた。これによって、芥川はかなりの刺激を受け、歴史物ばかり書けるかという自ら感じた創作の行き詰まりを打開し、中国旅行により、自分の創作に新鮮な活力をもたらそうと努めた。新聞社側の熱望と期待について、大正十年三月三十一日付の新聞に載せられた「支那印象記 芥川龍之介氏・新人の眼に映じた新しき支那・近日の紙上より掲載の筈」という見出しの記事（邱雅芬、同前掲）は、それらを明らかに表出しえたと言えよう。少し長くなるが、それを引用しておこう。

「支那は世界の謎として最も興味の深い国である。旧き支那が老樹の如く横たわっている側に、新しき支那は嫩草の如く伸びんとしてゐる。政治、風俗、思想、有らゆる方面に支那固有の文化が、新世界のそれと相交錯する所に支那の興味はある。新人ラッセル氏やデュウィ教授の現に支那にあるのも、またベルグソン教授の遠からず海を越えて来ようとするのも、やがてこの点に心を牽かるるに外ならぬ。わが社はここに見る所あり、近日の紙上より芥川龍之介氏の『支那印象記』を掲載する。芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表的作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られている。氏は今筆を載せて上海に在り、江南一帯の花を狩り尽くした後は、やがて春をもとめて北京に上るべく、行々想を自然の風物に寄せると共に、交りを彼の土の新人と結びて、努めて若き支那の面目を観察しようとしている。新人の観たる支那が如何に新様と新意に饒なるものであるかは唯本編に依ってのみ見られよう。」

「現代文壇の第一人者」とされた芥川のこれからの「支那印象記」に対して、新聞社がどれほどの期待を持っていたかは、この自信あふれる紹介文から読み取れるだろう。

そして、長年の夢が叶い、芥川は、「大阪毎日新聞社の命を受け、大正十年三月下旬から同年七月上旬に至る一百二十余日の間に、上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などを遍歴し」（『支那遊記』自序）、その

成果を紀行文『支那遊記』に結晶させた。中国旅行は、芥川の創作にも、彼の中国認識にも、多大な影響を及ぼし、芥川文学を理解する際、不可欠なものとなる。そこで、『支那遊記』の記載に従い、同時に関口安義『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか——』（毎日新聞社、1997年2月10日第一刷）、鷺只雄『年表作家読本・芥川龍之介』（河出書房新社、1992年6月20日初版）を参考し、簡単に芥川の中国における足跡をたどってみよう。

芥川は、大正十年三月十九日、汽車で東京を発ったが、車中で発熱したため、約一週間大阪に滞在し、二十八日、門司から筑後丸で上海に向かった。上海到着後、乾性肋膜炎で里見病院に入院を余儀なくされた。四月二十三日、退院した後、早足で上海市内を見学し、清朝の旧臣で書道家でもあり、後に満州国初代國務総理となった鄭孝胥、孫文、黄興とともに「辛亥革命の三尊」とされる民族主義革命者であった章炳麟、社会主義者で「若き支那」を代表する李人傑と会見した。五月二日、杭州、西湖見物に出掛け、名妓蘇小小の墓や、中国最初の女性革命家であった秋瑾の墓、南宋の忠臣岳飛の廟などを見物した。八日、蘇州に着き、寒山寺、天平山、留園、西園などを見学し、杭州よりも蘇州には好感を持った。十一日、鎮江を経由して揚州に着き、揚州唯一の日本人で塩務官の高洲太吉に案内された。十二日、南京に到着し、「俗臭紛々たる柳橋」といった感じの秦淮に赴き、十四日まで南京に滞在した。十六日、上海に戻り、里見病院で診察を受けた。十九日、蕪湖に着き、西村貞吉の社宅に泊まった。二十三日、九江を経由して廬山に登った。二十六日頃、漢口に到着し、黄鶴楼の跡、古琴台などを見学した。三十日、漢口から洞庭湖を経て長沙に行き、六月一日にまた漢口に戻った。六日、京漢鉄道で洛陽に向かい、龍門を見学した。十四日、北京に到着。その後のほぼ一ヶ月北京に滞在し、「支那服」を着、毎日芝居を見、名所旧跡をめぐり、北京大学教授胡適、辜鴻銘にも会った。北京滞在中も大同へ石窟を見学に行った。七月十日頃北京を立ち、天津に滞在した。十二日の夜、汽車で奉天を経由し、釜山から船で帰国した。新聞社に報告のため立ち寄り、二十日頃、田端の自宅に戻った。以上のように、芥川は四ヶ月の間で駆け足に中国の大半を旅した。この旅行は病弱な芥川にとって、かなり苦難に満ちた強行軍だったと言えよう。

前述したように、中国から帰った芥川の中国認識に少し変化が生じ、中国へ

の親しみが薄くなり、中国への蔑視が著しくなった。しかし、この変化は決して根本的なものではない。なぜかという、中国旅行の前に、芥川は、すでに中国及び中国文化にある程度の蔑視や誤解を持ち、その後、中国の現実への蔑視を新たに持つようになったわけではないからである。その例として挙げられるのは、「首が落ちた話」における無頼漢としての何小二に対する描写や、「南京の基督」における無知、迷信の宋金花に対する描写などである。また、中国から帰った後も中国文化への親近感を全部失ってしまったわけではない。続いて漢詩を作ったり、篆刻をしたり、梅蘭芳の公演を見たりする姿勢が、これを裏付けているだろう。神田由美子の助言を借りれば、「こんな晩年の『支那』認識の一端には、まだあの幼時からの『支那』芸術への造詣が生み出したエキゾティシズムとロマンチシズムへの情熱もひそかに燃え続けていたと信じるのである。(略)彼は、晩年、やはり『支那』に深い愛着を寄せていた佐藤春夫と、共同で中国詩文の翻訳を試みる計画を持っていたという。」(「芥川龍之介と中国」『目白近代文学』、1979年6月号)中国旅行の結晶となる『支那遊記』の中に溢れている中国の現実への蔑視から、芥川は、その旅行の前に中国文化に親近感だけを抱き、蔑視を少しも持っていないのに対して、その旅行の後、中国現実への蔑視だけを持ち、中国古典文化への憧れが完全に消えたと一方的に考えるのは、やはり事実と合わず、誤っていると言わざるを得ない。中国古典への愛着、崇拝と、中国現実への蔑視、誤解とが交じっているという矛盾した中国認識は、芥川の全生涯を貫いていた。

この矛盾した中国認識は、芥川だけが持っていた個人的な問題でもなければ、一時的なものでもない。これは、明治大正時代の日本の知識人が普遍的に所有していた共通の心理である。周知のように、中国の古典文化はかつて世界の先頭に立っていた優れた文化であり、前近代の日本文化に強大な影響を与え、日本社会の隅から隅まで浸透していた。だから、中国の古典文化の恩恵を深く受けた日本人は、この文化に対して崇拝、憧憬の心理を抱いていた。芥川の世代にも、この心理がやはり存在していた。しかし、近代に入ると、明治維新によって一躍先進国になった日本では、知識人は、衰えつつあった後進国——中国に対して、優越感と大国意識を抱き、そして、近代中国のあらゆる面を軽蔑、敵視するようになった。特に、日清戦争後、中国蔑視観が一般的となり、民衆

の内心にまで染みこんでいた。このような歴史背景のもとで生まれ成長した芥川が、この影響をいっさい受けないということは、到底ありえないことである。

この矛盾した中国認識の由来について、詳しい分析は第四章に譲るが、ここで孟慶枢の至当な見方だけ引用しておく。「日本近代作家の中国文化教養は主に中国古典文学、古代文化から発生した。彼らの中国文化観の多くは観念的で、本から得たものである。彼らは、日本が近代社会に入った後は、中国文化に追従していかなかった。それで、彼らの中国現実に対する認識に亀裂が生じた。だから、一旦、彼らは中国現実に接触すると、過去、頭に沈殿した中国文化観によって、中国社会の各方面、特に文化の面を照らし、その間にギャップを感じた。その失望は、自然に彼らに一方的な認識を生み出させるに相違ない。この現象は芥川龍之介にばかりでなく、ほかの日本近代作家にも多かれ少なかれ現れている。」^⑱つまり、この中国認識は、明治に生まれて大正文壇に活躍した世代の共通心理である。

2 芥川の中国古典文化への愛着

2、1 中国古典文学との出会い

芥川の「支那趣味」はしばしば話題にされ、数多くの研究者によって論及されている。例えば、「芥川氏は現代文壇の第一人者、新興文芸の代表作家であると共に、支那趣味の愛好者としても亦世間に知られている」。(同前掲) また、菊池寛も芥川死後まもなく、「彼の如き高い教養と勝れた趣味と、和漢洋の学問を備へた作家は今後絶無であらう。古き和漢の伝統及び趣味と、歐洲の学問趣味とを一身に備へた意味において、過渡期の日本に於ける代表的な作家だらう。我々の次の時代に於ては、和漢の正統な伝統と趣味とが文芸に現れることなどは絶無であらうから」^⑲ (『文芸春秋』昭和二年九月号) と讃辞を送った。いったい、芥川の「支那趣味」とは何であろうか。この問題について、井上洋子は、「芥川龍之介の中国旅行と〈支那趣味〉の変容——(その一) 中国到着まで——」(『福岡国際大学紀要』第3号 平成12年2月) の中で少し触れ、その内実を「谷崎や芥川的美意識である〈支那趣味〉も、やはりアジア主義同様に、西洋との対抗概念なのである。西洋に対して日本文化のアイデンティテ

在の我々の心もちと可成密接な物が含まれてゐる。決して一概に輕蔑して然るべきものぢやない」と書いた。この発言は、漢詩文の日本文学の過去と現在における価値と意義を全面的に認め、明治維新後、漢詩文の無意義を唱えた人への反発としてかなり有力であろう。

芥川はよく書簡の中で漢詩文を評し、その鋭敏な理解と鑑識眼を示していた。例えば、東京府立三中卒業の年、恩師広瀬雄宛（1910年7月3日付）の便りの中に、「今日朝来微雨独座して許丁卯の詩集を繙く一味の暗愁の霧の如く人に迫るを感じ候。殊に其懷古七律の如き格調痛哀李義山に比すれば更に微、温飛卿に比すれば更に麗、青蓮少陵以降七律を以て斗南第一人の名ありしも誠に偶然ならず候^②」という一節がある。また「胡麻の花の赤き畑みちを経して帰り来る時に候。種豆南山下、草長豆苗稀とうたいたいなり候。^③」のような書簡も多数あるが、紙幅の制限で省いておく。このように、私たちは芥川の漢詩文についての論評を読めば、彼に常人の及びもつかない漢学の素養のあるのに驚くに違いない。

漢詩の外に、芭蕉の俳句についての論評からも、芥川の高い漢文学の素養が垣間見られる。『芭蕉雜記』（『全集』第十二卷、岩波書店）の中で、芥川は次のように書いている。「しかし、芭蕉は明らかにかう云ふ支那文学の影響を骨髓に入った一人である。（略）夙に蕉風を樹立した四十七歳の芭蕉さへ下の作品を残してゐる。鍾消て花の香は撞夕べかな。これは朱飲山の所謂倒装法を俳諧に試みたものである。たとへば、下の例に徴するがよい。紅稻啄残鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝。この名高い杜少陵の聯句は勿論意味を理解するためには、『鸚鵡啄残紅稻粒、鳳凰棲老碧梧枝』と両句とも名詞を入れ換へなければならぬ。芭蕉の句も意味を理解するためには、『鍾搗』いて花の香消ゆる夕べかなと動詞を入れ換へなければならぬことは全然上の例と同じことである。これを暗合と云ってしまへば兎にかく、もし僕の云ふように倒装法を用ひたるものとすれば、芭蕉の蒙った支那文学の影響は可成大きかったと云はなければならぬ。」

このように、朱飲山の倒置法や杜甫の詩を例に出し、「芭蕉の蒙った支那文学の影響」を説くのは、芥川の漢文学へ抜群な理解力と博識を物語っていると言わねばならない。因みに、山敷和男の調査（「所蔵漢籍から何が分かるか」『国文学』1996年4月号）によると、「芥川は杜甫について、作品で八回、手

イを確保しようとする時、文化の根源として〈支那〉が意識されてゆく。〈支那趣味〉には中国文化への愛着とコンプレックス、そして今や優位に立ったという優越感の複合した感情と言うべきであろう」と規定した。単援朝は、『支那遊記』についての分析の中で、「西洋との対抗概念」にも言及し、「その夢を汚すものとして見逃してはならないのは、むしろ『支那』の現実の中に存在する『下品』な、『場違い』の『西洋』である（略）『西洋』への拒否と東洋への傾斜、これは『支那遊記』の世界を底流するものの一つと言える」と書いた。

（「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実との間」『国語と国文学』1991年9月）芥川も書簡を以て、「僕は元来、東洋的エピキュリアンだからな^い。この間も支那人の隠居趣味を吹聴した本を読んで大いに同情した」（大正六年八月二十九日付、井川恭宛）と自ら証明した。一方、神田由美子は、「芥川龍之介と中国」（同前掲）の中で、芥川の「支那」へのエキゾチシズムを、主に「『隠遁趣味』や大らかなユーモアや諦念や忍従の美德という、『支那』の『静』の部分」と「『水滸伝』や『西遊記』『三国志』『金瓶梅』など四大奇書に代表される如き、『支那』のたくましい『動』の部分」への憧憬、愛着と捉えた。この問題を深く考えるとき、まず、芥川の読書歴や漢文学との出会いなどを調べる必要があるだろう。

読書歴については、芥川が自ら言及したこともあり、主に「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふところが多い」（『芥川龍之介全集』第二巻、岩波書店、1977年）、「愛読書の印象」（『全集』第十巻）、「私の文壇に出るまで」（『全集』第一巻）に集中している。これらの作品を参考にしながら、芥川の読書歴を簡単にたどってみよう。芥川は、小学校に通っている頃、近所の貸本屋の高い棚にある講釈の本などを、「何時の間にか端から端迄すっかり読み尽してしまった。やがて、さうしたものから導かれて、まづ『八大伝』を読み、『西遊記』『水滸伝』を読み（略）傍ら十才位の時から始めてゐた英語と漢学とを習った。

（略）中学時代には、泉鏡花のものに没頭して、それを悉く読んだ。漢詩も可成り読んだ。（略）高等学校から大学に進むと、小説は支那のものに移った。

『珠邨談怪』『新齊諧』『西廂記』『琵琶行』などを無闇と読んだ。（「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふところが多い」）ここから見れば、芥川の豊富多彩な読書歴の中で、中国古典文学の占めた割合が非常に大きいということが

分かる。また、芥川は「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喻談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであろうと思ふ。名高いバンヤンの『天路歷程』なども到底この『西遊記』の敵ではない。それから『水滸伝』も愛読書の一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は『水滸伝』の中の一百八人の豪傑の名前を悉く暗記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの『水滸伝』だの『西遊記』だのといふ方が遥かに僕に面白かった」と語る。（「愛読書の印象」）こうして、芥川は『西遊記』、『水滸伝』をバンヤンの『天路歷程』や押川春浪の冒険小説などとの比較を通し、その面白さを強調した。『水滸伝』の中の一百八人の豪傑の名前を悉く暗記してゐたことがある」というだけでも、その夢中の並々ならぬことを証明できるだろう。後年「大導寺信輔の半生」の中でも、小学生の頃に何度も『水滸伝』を読み返した情熱を描いている。「彼は又何度も木剣を提げ、干し菜をぶら下げた裏庭に『水滸伝』の中の人物と、——一丈青扈三娘や花和尚魯智深と格闘した。この情熱は三十年間、絶えず彼を支配しつづけた。」『西遊記』や『水滸伝』をはじめとする中国古典文学との出会いは、後年の芥川文学にかなり大きな影を落としたと思われる。

ここで少し補足したいのは、前掲した「十才位の時から始めてゐた英語と漢学」の勉強のことである。明治三十三年、八才の芥川は、芥川家の一中節の師匠宇治紫山の家へ近所の子とともに夜学に通い、その一人息子の大野勘一から英語や漢学、習字を習った。漢学は『日本外史』、習字は『千字文』より始め、小学校卒業近くまで続けた。

芥川の中国古典への関心ぶりは彼の読書歴から分かるが、彼の漢詩文における深い理解と造詣も自らの多数の発言によって窺える。最も有名なのは、やはり「漢文漢詩の面白味」（『文章倶楽部』1920年11月）という文章である。その中で、「漢詩漢文を読んで利益があるかどうか。私は利益があると思ふ。漢詩漢文を読むと云ふ事は、過去の日本文学を鑑賞する上にも利益があるだらうし、現在の日本文学を創造する上にも利益があるだらうと思ふ」と語った。また、「名高い杜牧（唐）の江湖に落魄して酒を載せて行く。楚腰纖細、掌中に軽し。十年一たび覚む、揚州の夢。贏ち得たり、青楼薄倖の名」を例挙し、これも「吉井勇君を想はせる所がないでもない。こんな具合に漢詩の中には、現

紙で三回、手帳で一回触れている。」また、日本近代文学館の「芥川龍之介文庫」には、芥川旧蔵書が収められている。その目録によれば、漢籍は一八八点一一七七冊である。②

芥川は漢詩文を読んだり、漢詩を作ったりするのみならず、漢詩を訳すことも計画した。このことは、佐藤春夫の「からものの因縁」にざっとかいてある。佐藤は、漢詩の名訳詩集として名高い『車塵集』の最初の十数篇を芥川に見せたら、芥川も自身もほぼ同数を作るから共著しようといい、結局芥川の自殺によって、佐藤だけが『車塵集』をまとめ、芥川の霊前に供えることになったという。これは前掲した神田由美子や山敷和男の論文がともに証明していることである。

優雅な漢詩文ばかりでなく、『聊齋志異』のような怪異談と『金瓶梅』『西廂記』のような淫書、恋愛小説も芥川にとっては、かなり興味深い存在であった。異常美、怪奇美、虚構美、ロマンチズムに対する偏好も、芥川が中国の典籍から汲み取ったものである。「中学時代には、泉鏡花のものに没頭して、それを悉く読んだ」のは、やはり泉鏡花の神秘的、怪異な作風に心を牽かれたからにはほかならない。幼い頃から怖い話に親しんだ芥川は、一高在学中には、養父母、伯母、親友などから聞いた妖怪談を『椒図志異』というノートに集めた。当時の怪異談への情熱は以下二通の書簡から垣間見られる。「MYSTERIOUS な話があったら教えてくれ給へ」（大正元年七月十五日付、井川恭宛）「Mysterious な話を何でもいいから書いてくれ給へ（略）時に図書館へ行って怪異と云ふ標題の目録をさがしてくる。」③（大正元年八月二日付、藤岡蔵六宛）一高卒業の大正二年の夏には、芥川は「本を少し読んだよんだと云ふ中には古ぼけた虞初新志や剪灯新話や五才子書や金瓶梅のやうな小説が多い横文字の本は殆よまなかった」（大正二年七月二十二日付、藤岡蔵六宛）と言っている。「大学に進むと、小説は支那のものに移った。『珠郎談怪』、『新齊諧』、『西廂記』、『琵琶行』などを無闇と読んだ。」（「小説を書き出したのは友人の煽動に負ふ所が多い」）ここで特筆に値するものは、芥川がそのいくつかの小説の材源に用いた中国怪異小説集『聊齋志異』である。これもすでに触れた『西遊記』『水滸伝』などとともに、繰り返し読まれたものである。先の『椒図志異』という題名も明らかに『聊齋志異』を意識して作られただろう。また『骨董羹』（大正四年

四—六月『人間』)には『聊齋志異』という一節がある。「聊齋志異が剪灯新話と共に、支那小説の中、鬼狐を説いて、寒灯為に青からんとする妙を極めたるは、恰く人の知る所なるべし。されど作者蒲松齡が、満州朝廷に潔からざるの余り、牛鬼蛇神の譚に託して、宮掖の隱微を諷したるは、往々本邦の読者の為に、看過せらるるの憾みなきに非ず。(略) 西班牙にゴヤの Los Caprichos あり。支那に留仙の聊齋志異あり。共に山精野鬼を借りて、乱臣賊子を罵殺せんとす。」(和田繁二郎、同前掲) このように、「怪奇、恋愛談の奥に社会に対する諷刺精神と蒲松齡の義憤を読み取る理解の深化に、当時一般的であった怪異趣味的理解を離れた人間批判意識は見られる。」(勝倉寿一著『『酒虫』——変革と生来』『芥川龍之介の歴史小説』、教育出版センター、昭和 58 年 6 月 10 日) 好奇心の旺盛な芥川も『金瓶梅』『西廂記』などの淫書、恋愛小説に心を奪われた。後年、『金瓶梅』『王嬌』(断片) ㉔ というタイトルの戯曲も書いた。彼は中国旅行の前に、旧友西村貞吉宛の書簡(1918 年 11 月 20 日付)には、「金瓶梅を始め痴婆子伝、紅杏伝、牡丹奇縁、灯芯奇僧伝、歡喜奇観などの淫書をよむとどうも支那人の開化した野蛮性が面白くなって来る」と言い、「上海の本屋でああ云ふ淫書が沢山出てゐるらしいがもし上記の外のものがあったら送ってくれ給へ金は大金でない限り送るから」と記した。これも芥川のエキゾチシズムやロマンチシズムを物語っている。

雅号は中国文人の間でよく使われ、そのつけ方も豊富多彩で中国文人趣味のシンボルとも言えよう。「支那趣味の愛好者」としての芥川も雅号を好み、「続澄江堂雜記 雅号」の中で、「雅号と言ふものはやはり作品と同じやうにその人の個性を示すものである」と述べた。この問題について、森本修の詳しい研究によると、「芥川が生涯に用いた別名約八十があげられているが、この数は芥川の別号に対する関心の度合を示す一つの例証といえよう。」(「芥川龍之介の別名」『人間 芥川龍之介』三弥井書店、昭和 56 年 5 月 29 日初版) 例えば、我鬼散人、聴香洞主、青萍狂生、椒図道人、下島勲に「支那臭い」と言われた澄江堂主人など中国流の雅号は、常に芥川の書簡、随筆、小説などに用いられた。ここで注意を要するのは寿陵余子という雅号の由来である。芥川は滝田樗蔭宛(大正九年三月三十一日付)の書簡の中で、これについて、「寿陵に余子あり歩を邯鄲に学ぶ未邯鄲の歩成らざるに寿陵の歩を忘る即蛇行匍匐して帰

るとか何とか云ふ文章が韓非子にあるのから拵へた号です。余子は唯青年と云ふ意味でせう僕自身西洋を学んで成らずその内に東洋を忘れてゐる所が邯鄲寿陵両所の歩き方を学び損なつた青年に似てゐると思つたからです」と記し、自分で反省し、東洋文化へ復歸しようとする姿が浮かび上がってくる。

以上は芥川の広範な中国古典の耽読ぶりを示したが、なぜこのような傾向があるかと聞かれると、主に歴史小説の発想や怪異への傾倒、読書による人生の体験などが挙げられる。彼の言葉をもつて言えば、あるテーマを芸術的に最も力強く表現するために、異常な事件を必要とするが、異常なだけに、今日の日本に起こつた事としては書きにくい。だから、それを昔か、日本以外の土地から求めなければならないという。魯迅はこの歴史小説の方法を「古代の事実を取り、新しい生命を注ぎ込むことで、現代人との関係が生じている」^{②⑨}と評価した。ここから歴史小説の発想や怪異への傾倒が読み取れるだろう。読書による人生の体験については、芥川の自伝であると見られる「大導寺信輔の半生」の中で、芥川の代弁者である信輔は「あらゆるものを本の中に学んだ」、「実際彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかつた。寧ろ行人を眺める為に本の中の人生を知らうとした」と述べている。

2、2 中国古代芸術への関心

「文学好きの家庭から」(『全集』第二巻)によると、養家芥川家は「代々御奥坊主だった」旧家であり、養父をはじめ、養母も伯母も皆趣味人であつた。彼はそういう雰囲気の中で育つたので、幼いころから風流趣味を身に付け、生涯書画、骨董、芝居に関心をもつことになった。芥川の主治医兼親友の下島勲は、「元来趣味などいふものは、天稟の性情はさることながら、多くはその環境から生まれて来る情操的なもので、かういふ血縁と家庭に育くまれた芥川君の文学者となつたのもまことに自然なことであり、又仮に画家となつてゐたとしても、決して不自然ではなからうと思はれるからである。」(「芥川龍之介と書画」『芥川龍之介の回想』近代作家研究叢書 91、日本図書センター)と証言していた。

中国書画への関心は、一高時代には同級の松岡譲の影響もあつていっそう募つた。また、一高時代のドイツ語の恩師菅虎雄は能書家として世間に知られ、

芥川は彼からも書の鑑賞についていろいろと教わった。のちに漱石の門下生になった芥川は、漱石から俳句、漢詩、書画などを学んだ。作家になってから、滝井孝作や小穴隆一といった新しい友達ができ、芥川の中国書画への関心は、一層ふくらむ。前掲した下島勲の文章によると、芥川はよく晚翠軒という骨董店に通い、中国画の複製や日本で開かれた中国画展の複製画帖などを買った。博物館で中国書画を鑑賞したり、中国旅行中も呉昌碩や陳宝琛、鄭孝胥などの書画家を訪ねて秘蔵の書画を見せてもらい、書画をもらったりしていたという。したがって、芥川所蔵の中国書画も少なくない。下島勲の調査によれば、「董九如作山水横物一幅。自身長崎にて得しもの」「金冬心人物横物二幅。支那にて得たるもの」「呉昌碩作墨蘭図一幅。上海にて直接貰ひしもの」「陳宝琛詩書一幅。芥川仁兄正書陳宝琛と署するもの」、「鄭孝胥詩書一幅。芥川仁兄大雅辛酉暮春孝胥と署したもの」などがある。

芥川は、倪雲林や惲南田をはじめとする中国画家の作品を好み、数多くの作品を見、優れた絵画鑑賞力を自分のものにした。その結晶とも言える「支那の画」(『全集』第五卷)という作品は、彼の鑑賞力の並々ならぬ面を示している。例えば、倪雲林の「松樹図」については、「南画は胸中の逸気を写せば、他は描いて問はないと云ふが、この墨しか着けない松にも、自然は仿佛と生きてゐはしないか。」と論じ、「蓮鷺図」については、「かう云ふ重重しい全体の感じは、近代の画にないばかりではない。大陸の風土に根を下した、隣邦の画にのみ見られるものである。(略)支那の画は実は思ひの外、日本の画には似てゐないらしい」と論じ、金冬心の「鬼趣図」については、「冬心のはさう云ふ妖気はない、その代わりどれも可愛げがある。」と論じ、いずれも抜群で、至当な発言だと思われる。また、「秋山図」の中で、「あの黄一峯は公孫大娘の剣器のやうなものでしたよ。筆墨はあっても、筆墨は見えない。唯何とも云へない神気が直ちに心に迫って来るのです。」という描写は、原典にはないが、見事に芥川の中国書画における深い造詣を表していると認めなければならない。

中国絵画への偏好も彼の創作に影響を及ぼしたに相違ない。下島勲も前掲した文章の中で、「読書から得た知識の輝きのほか、書画や骨董などから得た彼の知識が、如何に創作の上に光ってゐるかは知るものは知つてゐるやう」と述べた。実は、「秋山図」や、「地獄変」の屏風図、「杜子春」の夕暮の洛陽城外

の油絵のような景色の描写などは、芥川の中国絵画への深い関心なくしては成り立たなかったであろう。ここでは「今王煙客、王廉州、王石谷、惲南田、董其昌の出現する小説」であり、「洞庭万里の雲煙を咫尺に収めたと云ふ形」（大正九年十二月七日付、小穴隆一宛書簡）を取った『秋山図』だけ取り上げよう。吉田精一によると、「この作品を書く前に、倪雲林や惲南田の画集を愛好し（大八、九、二四滝井孝作宛書簡②⑥）、八大山人や王石谷の画の複製本を求めた（大九、一〇、三〇小穴隆一あて②⑦）。」（『秋山図』について）『芥川龍之介Ⅱ』、桜楓社、昭和56年11月12日第一刷）この小説は、「甌香館画跋」の「秋山図の始末を記す」から素材を取り、芥川の芸術観の集大成である。芥川は、故意に中国人の画号、書齋号、別号などを混同して使うから、中国絵画史をある程度知っている読者も、作中の人物関係をはっきり区分できないだろう。また、南画好きな芥川は、無論、南画の祖と言われる王維に親近感を持っている。例えば、「戯作三昧」の「+」の末尾の方に、渡辺華山が持ってきた「淡彩の寒山拾得」をほめる言葉に、「何時もながら、結構な御出来ですな。私は王摩詰を思ひ出します。食随鳴磬巢鳥下、行踏空林落葉声と云ふ所でせう」とある。大正六年九月四日付の井川恭宛の書簡に「王摩詰などの高等遊民ぶりは実にうらやましい」（山敷和男、同前掲）という一節もある。

中国書画のほかに、中国旅行中とその後、芥川は京劇や昆曲が好きになった。これについては、施小煒の「芥川龍之介の観た京劇」（『文芸と批評』7巻8号、1993年10月）という論文にかなり詳しい。「上海遊記」では、芥川は九と十の二章を以て、「戲台」というタイトルのもとで、上海における三度ぐらい観劇体験を記した。北京では、芥川は「毎日支那服を着ては芝居まはりをして②⑧」いた。「北京日記抄」の「四・蝴蝶夢」に、こうした「芝居まはり」の一端を記した。芥川は、盖叫天、緑牡丹、梅蘭芳、楊小樓、尚小雲などの名優の芝居を見たばかりでなく、北京では胡適と旧劇の改良をめぐって議論し、②⑨梅蘭芳の1924年に行われた訪日公演を見た。これは芥川の京劇への傾倒ぶりを示している。因みに、鷲只雄『年表作家読本 芥川龍之介』（同前掲）によると、芥川は、1922年ころから篆刻にも興味を持ち、主に収集と鑑賞の面に傾いた。その鑑賞力が優れているので、貴重なものを多く収集し、友人宛の書簡の中でも篆刻について常に言及し、「わが家の古玩」（『全集』第十二巻）にも、『越

哉』及び『鳳鳴岐山』と刻せる浜村蔵六の石印」が出ている。なお、芥川の短篇集の題名のつけ方とその本の装幀の「支那趣味」については、『批評と研究 芥川龍之介』の「人と作品」を参照してほしい。

2、3 作品中の中国像

芥川文学における中国像は、大きく五つに分類される。まず、第一に挙げられるのは歴史小説の中の「中国」であり、普通「中国物」と呼ばれ、多く中国の古典を典拠とする。第二は現代の中国を舞台として創作された現代小説の中の「中国」である。第三は芥川が作った漢詩文中の「中国」である。第四は『支那遊記』という芥川が生の中国を見て書いた紀行文の「中国」である。最後に挙げられるのは、この他の作品にしばしば出ている中国史上の人物や事件からなる片鱗の「中国」である。このような漢文学の匂いが漂う数多くの作品から、私たちは、芥川の中国古典への並々ならぬ愛着と深い理解を十分味わうことができるだろう。以下において、このような作品を調べながら、芥川文学における中国古典への親近感を分析してみよう。

中国物の出典については、多くの研究者が指摘してきた。ここで、吉田精一の解説、海老井英次の「芥川龍之介文学典拠一覧」（『国文学』37 巻 2 号）李愛順「芥川龍之介の中国—仙人考—」（『広島大学教育学部紀要』第二部、第 48 号、1999 年）の中の論及を合わせ、できるだけ全面的に例挙（製作年代順）してみよう。

「仙人」（大正四年七月二十三日）——『聊齋志異』の「鼠戯」、「雨銭」

「酒虫」（大正五年四月）——『聊齋志異』巻十四「酒虫」

「女体」（大正六年九月）——出典不明

「黄梁夢」（大正六年十月）——沈既濟「枕中記」

「英雄の器」（大正六年十一月）——『通俗楚漢軍談』巻十二

「首が落ちた話」（大正七年一月）——『聊齋志異』巻三「諸城某甲」

「尾生の信」（大正八年十二月）——『史記』「蘇秦列伝」

「杜子春」（大正九年六月）——鄭還古撰「杜子春伝」（李複言作ともいわれる）

「秋山図」（大正九年十二月）——今関寿麿『東洋画論集成』「甌香館集補遺画跋」の「記秋山図始末」

「奇遇」（大正十年三月）——『剪灯新話』卷二「渭塘奇遇記」

「女仙」（昭和二年二月二十五日）——『太平広記』か、白川鯉洋『支那仙人列伝』

このほかに、前掲した「金瓶梅」「王嬙」のような未定稿もあり、高潔の新しい研究（《芥川龍之介と〈聊斎志異〉》、日語学习与研究、2002年第1期）によると、『聊斎志異』の中の「佟客」と「魔術」（大正九年一月）、「勞山道士」と「仙人」（大正十一年四月）、「王蘭」、「耿十八」と「馬の脚」（大正十四年一月）との細部においては、それぞれかなりの類似点もある。また、須田千里は、『唐代叢書』に収録されている「士人甲」を「馬の脚」と詳しく比較し、こうした実証を踏まえて、「従来、中国文学の芥川に対する影響力に関して、実作面の成果は『杜子春』（大正9年6月）までと考えられていたが、『馬の脚』など、実際はその晩年まで続いていたことが確認できる^⑩」（「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』」、『光華日本文学』1996年8月）と示した。

このような中国古典から素材を得た作品を読むと、漢文学の教養の高い芥川が中国古典に大きな関心を持っていたということは既に明白になったと言える。ここでは芥川の中国古典に対する改編が見事に結実を示している「杜子春」だけ取りあげ、芥川の中国古典への関心を考察してみよう。まず、鉄冠子の朗吟した漢詩に注目することにする。「朝に北海に遊び、暮には蒼梧。袖裏の青蛇、胆気粗なり。三たび岳陽に入れども、人識らず。朗吟して、飛過す洞庭湖。」という雄大な漢詩によって、作品の神秘さがいっそう膨らむ。芥川の河西信三宛（1927年2月3日付）の書簡によると、「あの詩は、唐の蒲州永樂県の人呂巖、字は洞賓と申す仙人の作に有之候。年少の生徒には字義などをご説明に及ばざる乎。なほなほまたあの中鉄冠子と申すのは三国時代の左慈と申す仙人の道号に有之候。三国時代には候へども、何しろ長生不死の仙人故、唐代に出没すも差支へなかるべく候。」三国時代の仙人が唐代に出没し、中国全土を飛び回る途中詠んだこの漢詩は、この晩年の書簡から見ても、やはり芥川の気に入ったものであった。また、平岡敏夫は、「杜子春」の結末を泰山の麓の「桃の花ざかりというところに、作者の切実な願い桃源郷志向がのぞかれる」と説き、神田由美子は、それを「人界と仙郷の中間に位置する『支那』独特の『隠遁』の地であり、この『隠遁』の地こそ、漢籍や南画によって育てた芥川の『支

『支那趣味』が構築する別乾坤だったのである」(同前掲)と述べている。この「杜子春」のほかに、「首が落ちた話」における遼東平野の見渡すかぎりの高粱畑に関する描写や、「酒虫」における「支那の長山の打麦場」に関する描写なども、芥川の中国古典への親しみを連想させ、まさしく芥川の「支那趣味」の一端を具現している。しかし、「杜子春」のような中国物は、一見すると、どうも中国古典の翻案のような感じがし、魯迅も芥川作品に対して、「多く古い材料を使っていて、時には故事の翻訳に近いこと^⑩」(「鼻」の「訳者付記」1921年4月30日)という不満を抱いていたが、やはり芥川なりの強い主張が読み取れる。例えば、芥川は「杜子春」について、次のように言っている。「これは杜子春の名はあっても、名高い杜子春伝とは所々、大分話が違っています。」

(「杜子春」付記)「拙作『杜子春』は唐の小説杜子春伝の主人公を用ひをり候へども、話は三分の二以上創作に有之候。^⑪」(前掲した河西信三宛の書簡)芥川がこの作品において語ろうとしたのは、金持ちの生活に幸福があるわけでもなく、仙人になることにも幸福があるわけでもなく、人間らしい正直な生活に幸福があるということである。芥川は、これらの中国物に対する改編によって、人間性の善悪を問い、親子の愛情や恋人の純粋な愛情を詠い、理想的な生活を渴望し、自分の人生観をそこに託そうとした。

現代小説の中の「中国」については、「南京の基督」(大正九年六月二十二日)「アグニの神」(大正九年十二月)、「母」(大正十年八月)、「第四の夫から」(大正十三年四月)、「馬の脚」(大正十四年一月)、「湖南の扇」(大正十四年十二月)が挙げられる。このほかに、「影」(大正九年七月十四日)は横浜の日華洋行の主人陳彩と日本人妻房子との間の物語であり、「將軍」(大正十年十二月)にも両人の中国人間諜が登場している。このような作品は、やはり中国古典への親近の色が薄いが、「第四の夫から」は特別な作品である。どの家の門口にも必ず二三人が「僕」夫妻のように静かに居眠りをし、どの家の庭にも桃の花が満開である「こういふ平和に満ちた景色」に関する描写に、芥川の理想郷、桃源郷志向が読み取れるはずである。

漢詩文の中の「中国」については、芥川自作の数十首の漢詩や中国詩人についての若干の論評を通し、芥川が如何に漢文学に心酔していたかが容易に見てとれるだろう。芥川は漢詩を耽読して暗記するばかりでなく、自らも中国人の

漢詩をまねして漢詩を作った。例えば、「愁心尽日細細雨。橋北橋南楊柳多。棹女不知行客泪。哀吟一曲采蓮歌。^{③③}」という詩は、杜牧の「煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。」という「泊秦淮」を思わず髣髴させる。また、「簷戸蕭蕭修竹遮。寒梅斜隔碧窗紗。幽興一夜書帷下。靜讀陶詩落燭花。^{③④}」という詩は、芥川ののどかな書齋生活の実感を洩らしている。中国詩人についての論評については、前掲した「丁卯集」の感想と「漢文漢詩の面白味」は、その一斑を表している。山敷和男の論文によると、「芥川はどうしたことか、漢詩集はよく読んだらしいが、漢文の方はあまり読んだ形跡がない。『漢文漢詩の面白味』でも、漢文にふれるゆとりがない、といったきりである。」（同前掲）これは事実にあわないと思われる。中学校時代に書かれたとされる「出師表を読みて孔明を論ず」と、一高時校に書かれたとされる「讀孟子」との二篇の未定稿は、中国史上の人物が頻出し、漢文学の匂いがあふれ、芥川が漢文をずいぶん読んだ証拠として十分成り立つ。

現実の中国を厳しく批判した『支那遊記』にも、こういう中国古典への親近感が見られる。施小煒「中国——芥川龍之介……来て見て書いた」（『解釈と鑑賞』別冊、平成13年1月）によると、「芥川は社命という外の束縛と共に、漢文学の教養が内の束縛として現代中国に向ける彼の視線を左右し、そして教育の結果として脳中に植えつけられた漢詩文的なイメージは、否応無しに現実を観察する時の座標軸（frame reference）となって前景化している」だから、上海の雑踏に『金瓶梅』の陳敬濟、『品花寶鑑』の谿十一を見出したり、上海城隍廟の光景に愛読した『聊齋志異』『新齊諧』の挿画をダブらせたり、西湖の岸にいた三人の中国人に石碣村の阮小二、阮小五、阮小七を見出したり、蘇州の通りで武術の見世物をする男たちに「病大虫薛永とか、打虎将李忠とか云ふ豪傑」を見出したり、杭州の隴西李寓という札がある家に李白が住んでいると想像していた。また、揚州を流れる川の景色に杜牧の「青山隱々水迢迢」の趣が見られないとか、秦淮に「煙籠寒水月籠沙」という風景がないとか、潯阳江に「楓葉荻花秋瑟瑟」などの洒落た趣が何もないとかの批判にも、芥川の愛着するあまりの失望が読み取れる。芥川は現代の中国に、漢詩文だけの小説だの、中国古典によって構築されたエキゾチックで、ロマンチックな中国像を見出そうと努めていた。

この他の作品にも、中国史上の人物や事件が頻繁に出てくる。例えば、「義仲論」に、拓跋魏のこと、王荊公のこと、諸葛孔明のことなどが巧みに義仲のことに織り込まれている。「鼻」の中には「内供は震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かったという事を聞いた」とあり、「侏儒の言葉」には趙甌北の「論詩」も王世貞の言葉も引用されている。また、「文芸的な、余りに文芸的な」の中で、芥川は、日本人が『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』、『紅樓夢』、『品花宝鑑』などの長篇小説を絮々綿々と書き上げる肉体的力量には劣っていると思っている」と述べている。このような多量な採用自体は、芥川の中国古典における高い造詣と関心を示しているにほかならない。

3 芥川の近代中国の現実への蔑視

3、1『支那遊記』の中の中国像

『支那遊記』は芥川の中国旅行のお土産である。中国旅行は芥川の身心にも、作風にも、中国認識にも多大な影響を与えたから、宇野浩二はこれを「芥川の短い一生の中の、もっとも重大な一つである」と見なし、続いて「支那旅行は、芥川の病弱な体を一そう病弱にした、それは、直接ではなくとも、芥川が幾つかの不治に近い病気にかかる本になった、それは、又、芥川の命をちぢめる本の一つにもなった、そればかりではない、それは、芥川のもっとも大事な芸術の道を邪魔におちいる本にもなった。^③」(『芥川龍之介』文芸春秋新社、1953年5月)と述べた。三好行雄も、宇野と同じくこの中国旅行を「その転機を外からうながす運命的な事件であった」と言い、芥川はこの時、「まだなにも自覚なしに、滅びにいたる不吉な門をくぐった」「龍之介自身にもそれと気づかれぬほど隠微に、芥川文学の世界は徐々に、しかし確実に、ひずみつつあったのである」(「地底に潜むもの——『南京の基督』前後」『芥川龍之介論』筑摩書房、1993年3月10日初版)と繰り返している。こうしてみると、芥川の中国旅行の結晶で、中国蔑視があふれるとされるこの『支那遊記』が重大視されるのは無理もないだろう。『支那遊記』についての検討を通して、芥川は憧れの中国の土を踏んだ後、なぜ猛烈に中国の悪口を言い始めたか、中国旅行前の僅かの中国蔑視がなぜ著しく肥大化したかといった問題が明白にされるかも

しれない。

『支那遊記』に入る前に、まず「支那」という言葉に注目してみよう。現在、中国でも、日本でも、「支那」という呼称は中国に対する侮辱的表現とされている。おそらく、「支那人」と呼ばれたら、腹が立たない中国人は一人もいないだろう。この差別用語がどのようにできたかについて、伊藤一彦「中国と『支那』」（『中国研究月報』1995年3月号）、川島真「『支那』『支那国』『支那共和国』——日本外務省の対中呼称政策」などの論文を参照しつつ、この言葉の歴史をたどってみよう。「支那」という言葉は、最初にインド人が中国を呼んだ時の「チイナ」という語の当て字として、唐代にできたが、その後中国で広く使われることはなかったし、日本に伝わった後も、広く使われなかった。アヘン戦争以後、中国が絶えず欧米列強の侵略に苦しめられている実情が伝わってくると、日本人が文化の源流として大きな敬意を払ってきた中国のイメージに変化が生じ、「支那」の使用も拡大するようになった。また、明治十年代中期までに、すべて中国を「支那」と記した地理教科書により、中国の呼称として「支那」が日本国民の間に定着することになる。日清戦争後、中国蔑視の意味を帯び始めた。しかし、当時の留学生の中で、満州族の清朝の支配に反対するために、「支那」という言葉は、真の中国を呼ぶにふさわしい語として使われたことがある。例えば、魯迅はその時の宿帳に自ら国籍を「支那」と記し、黄興、宋教仁らは東京で発行した雑誌に『二十世紀之支那』というタイトルを付けた。1911年10月に、辛亥革命が起こり、中華民国が樹立されたが、日本政府はこの新政府を「支那共和国」と呼び、日本人も「支那」という語の使用に固執し続けた。したがって、日本人が中国（人）を「支那（人）」と呼ぶとき、意識するしないにかかわらず、そこに中国蔑視の念がこめられていることを中国人は強く感じるようになる。それぞれ一九一三年、一四年に日本に留学した郁達夫、郭沫若は、「作品において日本を取り上げることが最も多い作家であるが、彼らにとって取り上げられている日本人との関係のほとんどは、日本人の中国人蔑視の問題であるといえる。」（丸山昇「中国文学に現れた日本像」『日本文学』11巻2号）例えば、郭沫若は「お前達（日本人——引用者注）はこの『支那人』という三字を口にするだけで、お前達の極端な悪意を示す」と書き、郁達夫は「支那あるいは支那人というこの名称は（略）どのような屈辱、

絶望、悲憤、苦痛を引き起こすものであるか」と反発している。したがって、芥川は中華民国十年を知りつつも、あえて「支那」という言葉を使った。たとえ無意識に「支那」を使ったとしても、やはり、かすかな中国蔑視の意味が潜んでいると言える。同時代の中国人の反発を招くのも当然であろう。

さて、『支那遊記』の成立についても、簡単に述べてみよう。出発を控えた三月十一日、芥川は、当時の大阪毎日新聞社学芸部長だった薄田淳介宛の書簡の中で、「紀行は毎日書く訳にもいきましますまいが上海を中心にした南の印象記と北京を中心にした北の印象記と二つに分けて御送りする心算ですどうせ碌なもの出来ぬものと御思ひください」と書いた。しかし、病気や多忙の為、旅行中、新聞社に原稿を送る予定は実現しなかった。帰国後、メモをもとに、

『上海遊記』や『江南遊記』を一日に一回ずつ執筆し、それぞれ一九二一年八九月と一九二二年一二月の『大阪毎日新聞』に発表した。『江南遊記』の後にやはり一日に一回ずつ執筆しかけた未完成品である「長江遊記」は一九二四年九月『女性』に掲載され、「全体を二日ばかりに書いた」「北京日記抄」は一九二五年六月『改造』に載った。この上に、「画端書に書いたのを大抵はそのまま収めることにした」「雑信一束」が加えられ、同年十一月『支那遊記』が一卷として改造社から刊行された。この『支那遊記』の自序に、芥川は、『支那遊記』一卷は畢竟天の僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である。（略）僕のジャーナリスト的才能はこれ等の通信にも電光のやうに——少なくとも芝居の電光のやうに閃いてゐることは確かである」と記し、自負心が明らかに現れている。

しかし、果たして、芥川にはこういう天に恵まれたジャーナリスト的才能があったのか。あったとしたら、この才能は確かに『支那遊記』に「電光のやうに閃いてゐる」のか。また、前掲薄田淳介宛の書簡に「一昨日精養軒の送別会席上にて里見弴講演して曰く『支那人は昔偉かったその偉い支那人が今急に偉くなくなるということはどうしても考えられぬ支那へいったら昔の支那の偉大ばかり見ずに今の支那の偉大もさがして来給へ』と私もその心算であるのです」とあり、「努めて若き支那の面目を観察しようとする意識が確認されるが、いったい芥川は今の「若き支那」の面目をはっきりと観察したのか。こういった質問に答えるために、まず本文に入り、詳しく検証してみよう。

芥川は、まず中国人の貧困、不潔と中国の遅れた光景に注目し、それらを同情、理解するどころか、劣等民族を見下ろすような嫌悪の目付きで嘲っていた。例えば、不潔で「皆怪しげな人相をしている」車屋や「口角泡を飛ばして」チップをねだる馭者、図図しい花売りの婆さんなどは、芥川の「支那の第一瞥であつた」。このほかに、「悠々と池に小便していた」一人の中国人、上海城内の敷石から漂う尿臭、「美しい袖を翻して、見事に床上へ手漬をかんだ」女形の姿、劇場のタオルで「さんざん顔を拭いた挙句鼻をかんだ」支那人、「雨の降る往来に寝ころんでいたり、新聞紙の反古しか着ていなかったり、石榴のように肉の腐った膝頭をべろべろ嘗めて」いる乞食、「味覚以外の感覚は」「ショックを受けるような所ばかり」の料理店、「青蠅が何匹も止まっている」岳飛の墓前の鉄像、守宮や蜘蛛が出没する新新旅館、「乞食の技巧としては、最も進歩した所を見せる」靈隠寺の乞食、蝙蝠の糞で臭かった蘇州の文廟、「大溝」としか思えない揚州の大川、みすぼらい揚州の町並、尿をする豚が出る蕪湖の往来、鎮江の「頗原始な貧民窟」、「夏以外は唯泥田の中に川が一すじあるだけである」洞庭湖、「往来に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町」である長沙、「大きい街頭の柳の枝に辮髪が二すじぶら下っている」鄭州などのような描写は枚挙にいとまがない。さらに、芥川がこのように描いた後の評論に注目すべきである。例えば、芥川は池に小便している支那人を見た後、「これは憂鬱愛すべき風景画たるばかりじゃない。同時に又わが老大国の辛辣恐れるべき象徴である」と書いた。また、「宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である」蘇州文廟の荒廃ぶりを見た後も、芥川は「それを思えば、この荒廃は、直に支那の荒廃ではないか」と反問した。「皮を剥いた儘、後足を上にぶら下っている」豚を目撃した後も、芥川は「所詮支那程下らない国は何処にもあるまいと考えた」。いずれも辛辣な風刺だと認めなければならない。

これに対して、祝振媛は、「彼の目的は中国の苦難と『醜』を収集して日本国内の喝采を得ようとするのである」と見なし、「芥川氏は『支那遊記』の中の中国の貧困、遅れの『醜』を多く網羅して、それを興味深く嘲ったり、風刺したりしているが、彼の目的は単純に『醜』を暴露することではなく、中国の『遅れ』と『醜い』事を示すことを通して、当時の中国を徹底的に否定し、中国の文化思想を否定しようとするのである」（同前掲）と厳しく批判した。芥

川の目的はそれほど悪意に満ちたものではないと思うが、中国人の不潔や中国の遅れに対するこれほど過剰な描写は、やはり端的に芥川の中国の現実への蔑視を表していると言わざるを得ない。

徐静波《村松梢風の中国游历和中国观研究——兼论同时期日本文人の中国観》（日本学论坛、2001 年第 2 期）によると、「切っても切れない中国文化コンプレックスと『日本人』意識は大正、昭和前期の大部分の日本文人の中国観の二つ基本的な面を構成している。この二つの面ははっきりと分けられるわけではなく、多くの場合は交わっている。」（引用者訳）以上の描写は、芥川はアジアの唯一の先進国の国民として、遅れた中国国民の劣等性を批判したものであり、「日本人」意識からくるものでもある。一方、中国古典文化に親しんだ芥川も中国文化コンプレックスの影響で、漢詩文や南画の中の中国像を基準にして、彼のエキゾチシズムを汚す近代中国の「俗悪な」西洋化を批判した。芥川は漢口に向かう前に、「支那ノ風景ハ全然西洋ノ文明ト調和シナイ」（大正 10 年 5 月 16 日付、小穴隆一宛絵葉書）と書き、中国の西洋化に対する嫌悪を的確に表した。実例を言えば、芥川は「赤煉瓦の三階か四階」の建物の多い、「各国の人間が寄り集まっている」上海を「支那第一の『悪の都会』」「蛮市」「場違い」の西洋と見なし、「現代の支那なるものは、詩文にあるような支那じゃない、猥褻な、残酷な、食意地の張った、小説にあるような支那である」という結論を導き出した。杭州では、芥川は、「西湖の俗化は益々盛になる傾向」を見出し、「この二色の煉瓦建は、殆ど大きい南京虫のように、古跡と云わず名勝と云わず江南一帯に蔓った結果、悉く風景を破壊している」と書いた。南京では、「煙籠寒水月籠沙」のような風景がないため、芥川は秦淮を「俗臭紛々たる柳橋」と目した。また、揚州を流れる川に「名高い杜牧の詩にあるような『青山隱隱水迢迢』の趣などは見られそうもない」ため、また潯阳江に「楓葉荻花秋瑟瑟などと云う、洒落れた趣などは何処にもない」ため、芥川は大いに失望した。杜牧や白樂天の詩に当てはまるような「支那」がないのは、結果的には「小説にある支那」という発見を証明することになる。だから、単援朝は「文学によって構築された『支那』の夢が、単に現実との接点に留まらず、現実認識ないし価値判断の基準として機能することになるのである（「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実の間——）」と述べ、芥川の中国文化

コンプレックスによる視線を明らかにした。ここで注意を要するのは、「僕は西洋が嫌いなのじゃない。俗悪なものが嫌いなのだ」という芥川の西洋認識のありかである。

一方、「新聞社が求めていたのは生きて動いている中国、欧米日の帝国主義列強が蚕食し、角逐を繰り返すアクチュアルな中国のレポートであった。」（鷺只雄、同前掲）しかし、芥川はその要望に積極的に応えようとしたが、結局、実現できなかった。彼は、「徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社会の問題」を滔々と述べた章炳麟に会っても、章氏の話を聞きながらも、「支那問題とは没交渉に」「時々壁上の鰐を眺めた。」「上海における『若き支那』を代表すべき」李人傑、つまり芥川が北京にいた間、開催された中国共産党結成大会に出席した李漢俊^⑧にも会ったが、結局、「李人傑の概要やその風貌は伝えても、その心の奥底に入りこんでの鋭い一瞥の記事はない。」（紅野敏郎「芥川龍之介『支那遊記』と『湖南の扇』『近代日本文学における中国像』有斐閣選書、昭和50年10月）上海の外国人しか入園できないパブリックガーデンについても、芥川はその原因をえぐり出さず、ただ「命名の妙」しか感じていなかった。西湖のほとりで排日の歌を歌っていた中学生に出会っても、蘇州天平山で排日の落書きを見ても、長沙天心第一女子師範学校で、女学生は排日のため日本製の鉛筆などを用いず、筆硯で幾何や代数をやっていた風景にぶつかっても、彼は、排日の根源を深く考えてみようとする努力を放棄し、ただ反感を覚えた。また、中国古典の造詣が高いと言われる芥川でも、やはり中国古典文化にある種の誤解を持っていたと言わざるを得ない。例えば、蘇州玄妙觀の前で武術の見世物をしていた二人の中国人に打虎将李忠、病大虫薛永を見出した後、芥川は『水滸伝』の百八人の豪傑を「無頼漢の結社」とし、『水滸伝』の神髓を「放火殺人」とまとめ、愛読する『水滸伝』さえも完全に理解していなかった。

このように、旅行中感じ取った失望、不満、反感が増大した挙句、芥川はついに蕪湖唐家花園のバルコンにおいて最も猛烈に中国の現実を批判した。「現代の支那に何があるか？政治、学問、経済、芸術、悉く墮落しているではないか？特に芸術となった日には、嘉慶道光の間以来、一つでも自慢になる作品があるか？しかも国民は老若を問わず、太平楽ばかり唱えている。成程若い国民

の中には、多少の活力も見えるかもしれない。しかし、彼等の声と雖も、全国民の胸に響くべき、大いなる情熱のないのは事実である。私は支那を愛さない。愛したいにしても愛し得ない。この国民的腐敗を目撃した後も、なお且支那を愛し得るものは、頽唐を極めたセンシュアリストか、浅薄なる支那趣味の憧憬者であろう。いや、支那人自身にしても、心さえ昏んでいないとすれば、我々一介の旅客よりも、もっと嫌悪に堪えない筈である。②⑦」以上、多少の繁雑さを顧みず、本稿では重大視される『支那遊記』の様相を分析し、そこにあふれる中国現実への蔑視という芥川の姿勢を明らかにした。

3、2『支那遊記』に対する従来の評価と中国人の反発

総じて謂えば、『支那遊記』は長い間、否定的に捉えられる傾向にあった。まず、同時代の村松梢風の批評を取り上げてみよう。村松梢風は作品の内容について、「何者に対しても自己一流の見方を立て解釈を下さねばやまない。あるが儘の自然を楽しむ雅懐が欠けている。総じて素直な気持ちで物に向かうことがこの人にはできないらしい。(略)謂わば偏狭に近い態度で物に接すると、幸い稀に気に入った場合はいいが、大概の物の癢の種となる外の運命はない」②⑧（「芥川氏の『支那遊記』を評す」『騷人』、1926年4月）と書いた。吉田精一は「要するに小説家の見た中国であって、新聞が、もしくは新聞の読者が期待したかもしれぬような、支那の現在や将来を深く洞察し得たものではない。」（『芥川龍之介』三省堂、1942年12月）と述べた。武田泰淳も、「芥川龍之介が『支那遊記』に於いて、いたずらにとぎすまされた感覚を走らせたばかりで、ついに大陸国民の苦悩を自己の問題として取り上げ得なかった②⑨」（「中国の小説と日本の小説」『文学』1950年10月）と記した。

その後、否定的評価が続出し、ほぼ定説化していたように見える。以下にその代表的な見方をいくつか挙げてみよう。「柳田（前略）生きた中国はみえていない。猪野　そういうアワだっている、中国人の生活に密着した状態では見ていない。やはり上海なんかの植民地的雰囲気、一種のエキゾチシズムをみているのですね。柳田　過去の艶史文学みたいなものだけを見てくる」（上原専祿、柳田泉、勝本清一郎、猪野健二「〈座談会・近代日本文学史13〉明治から大正へ」『文学』1961年9月）、「動きつつある中国、苦悩する中国、つまり現実の

中国への熱い関心、もしくは猛烈な好奇心につき動かされての執筆というより、中国の風物、雰囲気、名所旧蹟への興味が強く働いての執筆となっている」（紅野敏郎、同前掲）、「皮膚感覚にとどまる」（内村剛介「未熟と成熟——上目づかいの『支那遊記』——」『国文学』1977年5月）、「芥川は、『中華民国十年』という当時の激動する政治的状況を故意に無視し、中国の著名政治家・運動家との会見にも深い政治的興味は抱かず、現代になお残存する『支那風俗』や『支那美人』の面影に自己の中国像を重ねて、強い関心を見せていた」（神田由美子「中国旅行」菊池弘、久保田芳太郎、関口安義編『芥川研究事典』明治書院、1985年12月）「芥川という作家の目を通して描かれた中国で、客観性に欠けているところがある。（略）また、芥川の自負している『ジャーナリスト的才能』はあまり見られない。」（矢島道弘「江南遊記」同上）、「『新しき支那』の政治や社会の問題に対する時の、芥川の想像力の欠乏は否定しがたく、李人傑が李漢俊であったという事実は、その傷口をさらに広げるにすぎないかもしれない」（青柳達雄「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」、同前掲）、「芥川は、『大正』期の文人らしく、そういったアクチュアルな中国の現実、言うなら政治を核にした現実へは視線を集中していかなかった」（祖父江昭二『近代日本文学への射程——その視角と基盤と——』、未来社、1998年9月20日第一刷）、「彼の自負にもかかわらず、この本からジャーナリスト的才能を読むのは難しい。」（和田博文「芥川の上海体験」『国文学』2001年9月）以上概観してきたように、このような否定的評価は、主に小説家である芥川は激動する中国の現実状況への関心が薄く、その観察の目が中国の現実を捉えず、興味本位に走る傾向が強いことに起因するものであろう。

一方、従来 of 批評を覆して再評価を試みようとする動きも近年少しずつ出てきた。吉田精一は前掲論文の中で、文章（文体）のうまさを基準として、「機知と諧謔と皮肉が百出して、つまらない読物ではない」と評した。単援朝は、共産党の代表者李人傑との会見を基準にし、「芥川の『ジャーナリスト的才能』を認めなければならない」（「上海の芥川龍之介——共産党の代表者李人傑との接触——」『日本の文学第8集』有精堂、1992年8月）と述べた。鷲只雄は前掲書にとくに「『上海遊記』の意味」、「『上海遊記』の世界」の二項を立て、「徹底して作者の主観的印象であり、感覚的な、余りに皮膚感覚的な世界」を肯定

的に捉えた。吉岡由紀彦は前掲論文の中で、「ロマンチズムに浸らず、僅かではあるが当時の中国民衆の貧困への洞察をのぞかせ、谷崎との違いを示している」とか、「今日でも政治と無縁の『芸術家』を代表する作家のひとりとなされている芥川が訪中さなかに『政治』を論じだしたというのは、特筆に値する」と指摘した。さらに、関口安義は『特派員芥川龍之介』（同前掲）の中で、『支那遊記』はジャーナリストとしての鋭い眼がとらえた、激動の中国の現状報告書であって」と芥川の自負を認めた。松沢信佑は『新時代の芥川龍之介』（洋々社、1999年11月26日）の中で、「中国革命の知的指導者（略）李人傑に共感し、同情した」との読みから、芥川を「日本の誇るべき近代知識人」だと言った。ここで留意してほしいのは、このような肯定的評価が少数意見にとどまり、芥川の中国の現実への無関心と蔑視が『支那遊記』の随所に見えるのは事実だということである。彼らの肯定的評価の主な軸としての文人（とりわけ李人傑）との会見も、上陸したばかりで、中国語もできない芥川自身の手柄というより、現地の大阪毎日新聞社などの記者の配慮による行為と見るべきである。

一方、中国人はどのように『支那遊記』を受けとめているのか。関口安義は『特派員芥川龍之介』の中で、巴金の「幾段不恭敬的話」（『太白』1935年1月）を取り上げ、現代中国のすべては「墮落」しているとする芥川の見解について、「巴金はまず、日本に帰国した龍之介は、果たして右の文章の『支那』を『日本』に置き換えてみたことがあるだろうかと言ひ、日本に誇りとする芸術作品があるのか、と問う。音楽はどうか。ある東京帝国大学の学生は、『日本の音楽のことを問わないでください。日本人には耳がないのです』と語った。絵画はどうか。自分は帝展を一円を払ってみたが、千篇一律の筆致、景色、描写は、自分のような門外漢から観ても、町の広告画と同じであった。文学は日本では著しい発展を遂げているそうだが、現今の通俗小説の流行は、日本文学の衰弱を示しているのではないか」と巴金の反論と批判を紹介した。丁丁は『芥川龍之介の中国墮落観』（新時代第3巻新年号、1933年1月）の中で、「我々は芥川氏の故意にわれわれを侮辱するように見える態度に対して、反感を覚えるのは当然である」と記す一方、芥川が書いたことを事実として認めて元気を出そうと国民に呼びかけた。韓侍桁は「現代日本文学覚え書」（『文学評論集』

現代書局、1934年4月）の中で、「怪奇なことに、私は芥川氏の『支那遊記』を読んだあと、もう彼に好感を持つことができなくなるし、その上、彼の出世作『鼻』と『羅生門』を読むと、私はこの作家の芸術良識に対して疑問を感じざるを得なくなった④」と率直に言った。

在日中国人の学者も『支那遊記』を批判している。祝振媛は前掲論文の中で、「『支那遊記』は大正時代の産物である。芥川龍之介の狭い民族優越感と中国に対する差別意識はその時代の多くの日本知識人の限界を表している。（略）中国を劣等化した先入感の崇りでその作品を軽薄で力度の乏しいものとしてしまった」と酷評した。趙夢雲は前掲書の中で、「『上海遊記』（『支那遊記』も含めて）は、あくまでも作者の優越感に根ざした主観的、獵奇的、皮膚感覺的世界の再現で、文章を弄んだだけの役に立たない文字の積み上げであった。（略）列強に蚕食されつつあった上海——そこで中国の情報を収集、分析し、そこから現状を正確に把握し、未来を展望するといったジャーナリスト的作業は、『上海遊記』に限って言えばまったく見られない。芥川の自負した『ジャーナリスト的才能』は、結局、彼の甘さ、自惚れでしかなかったのではないかと厳しく批判した。施小煒も「中国——芥川龍之介……来て見て書いた」の中で、「意識の何処かに、中国を漢詩文の故国としか見なし得ず、現実の姿を拒否する何かが潜んでいるようである」と記した。前述してきたように、芥川の『支那遊記』がこれほどまでに中国人の不評と反発を買ったのは事実だと言える。

3、3 他の作品の中の中国蔑視

『支那遊記』のほかに、近代中国の現実への蔑視や誤解、無関心が潜んでいる作品もある。ここで代表的なものを取り上げ、その様子を分析してみよう。

「首が落ちた話」（『全集』第二巻）の場合では、日清戦争中、日本騎兵に軍刀で首を切られた何小二という中国人兵士を「日本の看護卒が見つけて介抱してやった」のはありえないと言わざるをえない。なぜなら、周知のように、旅順陥落後、日本軍は何の罪もない二万人余りの旅順市民を殺し、死体処理のため、36人だけ生き残らせたから、日本軍が瀕死の敵国兵士を救うとは考えられない。また、治療を受けた柔順な何小二が戦後、無頼漢を繰り返して死んだこと

から、「こんなことは支那でなくては、ありはしない」「人間はあてにならない」と語った木村少佐の見方も問われるべきであろう。つまり、芥川の日清戦争という侵略戦争についての歴史認識に問題がある。「南京の基督」（『全集』第四卷）では、無頼な混血児をキリストと思っている金花のキリスト教信仰の浅薄性や迷信性、他人に伝染することによって自分の梅毒が治ると思う山茶の衛生学的知識の欠如などが描かれ、「おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであろうか。それとも、黙って永久に、昔の西洋の伝説のやうな夢を見させて置くべきだろうか……」と迷う日本人の旅行家の姿勢も現れている。これに対して、丁丁は前掲した論文の中で、「彼（芥川、引用者注）はわれわれ中国人に科学の思想がなく、二十世紀の物質文明の現在でも、ひたすら宗教の迷夢に耽溺しているのを極端に風刺している（引用者訳）」と手厳しく批判した。

以上は中国旅行前の作品であるが、その後の作品はどうであろうか。まず、「新芸術家の眼に映じた支那の印象——芥川龍之介談」（天津『日華公論』第8巻第8号、1921年7月）という記事に注目しておきたい。芥川は帰国を控え、「私の支那に於ける第一印象としては鶏が油で焼いてあるのやそれから豚を丸の儘で皮を削いで吊り下げてあるのを至る所で見たことであります。支那では古くから各人が自由に動物を屠殺する習慣になって居るのは宜敷ないと思ひます。之は一般支那人が知らず識らずの間に残忍性を帯びて来ることであります。⑩」といった見当外れの発言もした。しかし、彼が知ることのなかったのちの日中戦争はともかくとして、日清戦争や中国の領土で行われた日露戦争の中、罪もない中国民衆を虐殺した大日本帝国の軍人の仕業を彼は知らないはずがない。

大正十三年四月に発表された「第四の夫から」（『全集』第6巻）でも、ラサののどかな光景が描かれる一方、「怠惰を悪徳としない美風を徳としてゐる」「鼻を削ぎ落とすのはチベットの私刑の一つである」などの描写から、ラサが原始的、閉鎖的、遅れたところであるという意味もうかがえる。さらに、大正十四年十二月に書かれた「湖南の扇」（『全集』第8巻）は、主人公の＜僕＞が大学時代の旧友譚永年に長沙を案内してもらい、妓館で、斬罪にあった土匪黄六一の情婦玉蘭が黄の首の血をしみこませたビスケットを噛むという場面を見たといったストーリーの作品である。関口安義は『特派員芥川龍之介』の中

で、芥川の「病んだ末期の眼は、的確に隣国中国の未来を見抜いていた」と記し、また『芥川龍之介全作品事典』（同前掲）の中で、「中国人の情熱的行為に羨望の目を向けた作品である」と積極的に評価した。単援朝も「芥川龍之介『湖南の扇』の虚と実——魯迅の『葉』をも視野に入れて」（『日本研究』2002年2月）の中で、「玉蘭のような『情熱に富んだ湖南の民』が生活する中国は、（略）美しいものと野蛮なもの、現実と非現実が常に混在する不思議な土地、たくましい行動力、生命力への憧憬が託された絶望的なく救済の場でもある」と同じく好意的に評した。芥川もこの作品のはじめに、「この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるかもしれない」と自ら述べた。この作品のモチーフは果たしてこのように受け止めてもいいのか。「僕は当時長江に沿うた大抵の都会に幻滅してゐたから、長沙にも勿論豚の外に見るものがないことを覚悟してゐた。しかしかう言ふ見すばらしさはやはり僕には失望に近い感情を与へたのに違ひなかった」とか、「土匪の斬罪か何か見物でも出来りゃ格別だが」とか、「或女学校を参観に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じてゐた」などの描写から見れば、革命家が生まれる湖南にこんな事件が生じたということの原因や排日に根源を深く掘り下げようとする努力が見られないのに反して、獵奇的な視線が非常に目立つ。つまり、芥川は、湖南の民が血のしみこませたビスケットを食べると「無病息災」になると思うのは、遅れた近代中国の野蛮な一面であるとひそかに受け止めているように見える。

以上のような近代中国を舞台とした作品から見れば、このような人物描写とストーリーの設定は、近代の中国像や中国人像を歪曲し、冷ややかな嘲笑や皮肉によって、芥川の近代中国の現実への蔑視、誤解、無関心を示している。

3、4 漱石との関連

『支那遊記』の中の芥川の中国認識について、前掲した「＜座談会・近代文学史 13＞明治から大正へ」の中で、上原専祿は「明治末期に書かれた漱石の『満韓ところどころ』などに出てくる中国観みたいなものです」とすでに指摘した。前述したように、祝振媛も「芥川龍之介の狭い民族優越感と中国に対する差別意識はその時代の多くの日本知識人の限界を表している」と述べた。第

一章で論じたように、中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが混同しているという中国認識は、芥川の個人的な問題でもなければ、一時的な問題でもなく、明治末期から昭和前期にかけての日本文人の共通心理だと言える。脱亜論、興亜論（アジア主義）、制覇論といったこの時代の中国認識の底流をなすものは近代中国の現実への蔑視、誤解そのものである。このような時代に生きた日本文人はこのような中国認識の影響のもとで、程度が異なっているが、みなこういう矛盾した中国認識を持っていた。佐藤春夫のことは既に述べたが、ここで明治の大文豪であり、同時に芥川の恩師でもある漱石の『満韓ところどころ』を取り上げ、漱石における中国の現実への傲慢と偏見を見出してみよう。

漢文学の造詣が深く、中国古典文化に親しんだ漱石は、明治四十二年九月二日から約一ヶ月半に亘り、中国の東北地方と朝鮮半島を旅した。帰国後、漱石は断続的に『朝日新聞』に見聞記を連載し、高い評価が得られないため、これを中断して『満韓ところどころ』にまとめた。崔明淑は「夏目漱石『満韓ところどころ』——明治知識人の限界と『朝鮮・中国人』像」（『解釈と鑑賞』1997年12月号）の中で、『満韓ところどころ』には、『朝鮮・中国人』に比べ相対的に上位を確保した『日本人』像を見出し、西欧に対し感じていた劣等感を忘れて優越感へすり替えようとする強い気持ちが散見される」と説き、「結局ここから見出されるのは『朝鮮・中国』を『文明化』すべき対象と見做したことであるが、しまいにはこれはアジアにおける日本の植民政策を正当化する論理へとつながる」という結論を導き出した。友田悦生も「夏目漱石と中国・朝鮮——『満韓ところどころ』の問題——」（『作家のアジア体験——近代日本文学の陰面』、同前掲）の中で、「漱石が中国や朝鮮の民衆に対して差別意識を所有し、ためらいもなくそれを表現している」と批判した。確かに、「クーリー団」や「鳴動連」、馬車の御者などに対する過剰な描写や、「チャン」が一回、「チャンチャン」が二回、「汚い」或いは「汚らしい」が七回も出てくる^④ことは、以上の論点を裏付けている。漱石でさえこんな中国認識をまぬがれることができないのは、やはり当時の日本知識人の限界を示している。

漱石、芥川の言動がみな中国侵略と直接に関わっていたわけではないが、このような近代中国の現実についての発言は、彼らの中国認識に帰着し、結果的に見れば、後年の中国侵略の推進力になっていると言えよう。漱石、芥川のほ

かに、武者小路実篤、横光利一、阿部知二などの詳しい様相は王向远《笔部队和侵华战争》に譲る。

4 矛盾した中国認識の他の原因

以上述べてきたように、中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが芥川の矛盾した中国認識をなしている。この矛盾した中国認識の由來について、すでに孟慶枢のヤウスの受容美学に近い至当な見解を述べたが、実は、前述各章でもこの原因の探求を一部試みた。第一章では、日本とかかわった中国社会の変遷や、脱亜論、興亜論、制覇論といった当時の中国認識及びこの三者の共通した中国蔑視論、日本優越論といった社会風潮などの歴史背景を記し、この激動した時代に生きた芥川が近代中国の現実への蔑視、偏見、誤解を所有しないわけにはいかないということを明白にした。第二章では、芥川の中国古典文学の読書歴や、中国古代芸術への関心、作品中の中国像などを述べ、芥川が中国古典文化に親しみ、並ならぬ愛着と造詣を持つということの原因を究明した。第三章では、生の中国の現実を描いた『支那遊記』の中の様相を示し、近代中国の現実が芥川の理想的な中国像、「支那」の夢を汚して壊したということを示した。ここで、以上の原因のほかに、私は、また、オリエンタリズムや受容美学、芸術至上主義の創作姿勢などの視点から、この矛盾した中国認識の原因を探ろうと思う。

4、1 オリエンタリズムの視点から④

周知のように、ポストコロニアリズムの元祖と言われるアメリカのコロンビア大学教授エドワード・W・サイードは、1978年に『オリエンタリズム』という画期的な本を出し、学界に頗る大きな反響をもたらした。この本は世に出て以来、盛んに引用、研究され、ポストコロニアリズムの入門書と位置づけられている。ここで、この本を参照しつつ、芥川におけるオリエンタリズムの様相を明らかにしてみたい。

この本における「オリエント」と「オクシデント」は一般的に言われる空洞的な地理概念としての東洋と西洋とは異なり、相互に依存している、政治的、文化的意味を帯びた心象地理概念である。サイードによると、オリエンタリズ

ムは三つの意味からなっている。第一に、オリエンタリズムは一種の学問の名称であり、これまでの東洋研究に取って代わられた。人類学、社会学、歴史学のような、どんな学術分野でも、オリエントに関わる教育、創作、研究活動をしている人は、みなオリエンタリストと呼ばれる。第二に、オリエンタリズムは「オリエント」と「オクシデント」との異なる本体論、認識論に基づいた思考様式である。つまり、西洋人が自ら自分を文明的、先進的、科学的、中心的、優位的なものとして、「他者」（オリエント）を野蛮的、後進的、無知的、周辺の、劣位的なものとして対立的に規定する思考様式である。第三に、オリエンタリズムは言説方式と権力システムであり、すなわち、「オリエントに関わる陳述を作り出すことによって、オリエントに関わるものに対して権威的な裁断を下し、オリエントに対する描写、教化、植民、支配などの方式を通じてオリエントを処理する構造である。要するに、オリエンタリズムを、オクシデントがオリエントを制御、再構成、管理する一種の方式と見做している。④」（賽义德著、王宇根译、《东方学》、北京三联书店、1999 年）従って、オリエンタリズムが表しているのは、オリエント世界におけるオクシデント世界の支配、覇権そのものである。オリエントについての描写、言説、評価は真のオリエントのそれではなく、オクシデントが自分の利益のために想像して作った虚構的なものであり、真のオリエント世界を歪曲している。オリエンタリズムの目的はオリエントに知識を教えるわけではなく、オリエントを支配、管理するところにある。サイードのこの理論は、M・フーコー（Michel Foucault）の知識・権力・言説という三位一体の理論や、J・デリダ（Jacques Derrida）のデイクンストラクション、Antonio Gramsci の文化覇権理論などによるところが大きい。

オリエンタリズムについて、武田悠一は前掲した論文の中で、「このくまなざし」（オリエンタリズムのまなざし、引用者注）が、『われわれ』（西洋）を『進んだ』ものとして、『彼ら』（オリエント）を『遅れた』ものとして価値づけるとき、オリエント蔑視が生み出されるだけでなく、植民主義や帝国主義が、『進んだ』西洋が『遅れた』非西洋世界を教化し、管理し、支配するものとして正当化される。（略）逆にまた、非西洋世界に対して現実に行われている教化と管理と支配こそが、西洋の優越性を証明するものとして、オリエンタリズムを強化し正当化する」とオリエンタリズムと植民地主義、帝国主義との関係

を捉えた。張法は《论后殖民理论》（教学与研究、1999 年第 1 期）の中で、「オリエンタリズムの中核はオクシデントの権力であり、知識の形を通してオクシデントの拡張有理、侵略有理、植民有理を支持している」（引用者訳）と述べた。

サイードはこの著書の中で、オクシデントがオリエントを対象にして、自分の利益のために、自分の言説でどのようにオリエントの文化、政治、芸術などを表現したか、またその表現が彼らのオリエントにおける政治、文化覇権の形成にどう機能したかについて論じたが、日本の知識人のアジア諸国についての言説はこの理論に該当するかどうか。私は当てはめることができると思う。なぜかという、日本の近代化は、まずなによりも西洋化を意味しているからである。「文明開化」という近代化政策は、開化した西洋文明を取り入れ、遅れた日本を西洋並みに文明化することを目指したものである。日本は、西洋列強のアジアへの帝国主義支配を強く懸念し、植民地化という屈辱を逃れるために、自ら西洋化を図ろうとし、結局、「富国強兵」というスローガンのもとに、経済的成長を遂げ、日清戦争、日露戦争を経て、西洋列強の仲間入りを実現した。その後、日本はアジアの唯一の「先進国」、世界でも「一等国」として、自らの西洋性を誇るために、「遅れた」中国、朝鮮などのアジア諸国に対する帝国主義的植民地化を推進した。こうして、日本も西洋のオリエンタリズムを所有するようになり、明治維新後の日本の知識人のアジア諸国（とりわけ中国）についての言説から、日本のオリエンタリズムを見出せるようになった。芥川もこの時代を文学者として生きていた。だから、オリエンタリズムの視点によって、芥川の中国に対する発言を研究することも可能になる。

サイードによれば、「オリエントはほぼヨーロッパ人の発明であり、昔から、ロマンチズムとエキゾチズムが満ちる、人間の記憶と視野にまつわる、怪奇的体験があるところである。^{④⑤}」本稿の第二章に引用された「MYSTERIOUS な話があったら教えてくれ給へ」（大正元年七月十五日付、井川恭宛）や、「金瓶梅を始め痴婆子伝、紅杏伝、牡丹奇縁、燈芯奇僧伝、歡喜奇観などの淫書をよむとどうも支那人の開化した野蛮性が面白くなってくる」（1918 年 11 月 20 日付、西村貞吉宛）などの書簡から、中国古典文学への愛着が読み取れる上に、井上洋子が指摘した「中国文化への愛着とコンプレックス、そして今や優位に

立ったという優越感の複合した感情」(同前掲)、つまり、オリエンタリズムにおけるエキゾチシズムの一側面がよくうかがえるに違いない。芥川が単に中国古典を好み、そこから小説の素材を得ただけでなく、中国を「遅れた」オリエントと見なしていたとも言える。このほかに、「首が落ちた話」の中の治った首が再び落ちた何小二や、「南京の基督」の中の奇望街という売春街に住む私窩子宋金花、「湖南の扇」の中の愛人の血をしみこませたビスケットを味わう玉蘭などにも、芥川はオリエンタリズムの視線を投じている。

このエキゾチシズムのほかに、オリエンタリズムは前述した通り、文明と野蛮、先進と後進、科学的と無知、中心と周辺、優位と劣位などの二元対立的な思考様式を内包している。オキシデント(西洋)は、常に自分を優秀な民族として、オリエントという他者を劣等的、野蛮な民族として位置づけ、自分の文化だけが世界文化の中心的存在として価値があるものと自任しているから、周辺に置かれた非西洋の文化を救うという使命を背負うことを当然なことと思いつけている。彼らは自国の近代化社会に存在しないエキゾチシズムを捜し求める一方、オリエントへの蔑視を生み出し、また「遅れた」非西洋社会を教化し、支配しようと思っている。サイードによれば、西洋の帝国主義の発展につれて、以前のオリエントに対する蔑視やエキゾチシズムから、オリエンタリズムが次第に生じてきた。この過程について、サイードは、「近代東洋の明らかな衰弱及び政治の無能に面して、ヨーロッパのオリエンタリストは自分には、既に消えた東洋の昔の輝きを救うことによって、近代東洋の『改良』を『推進』するという責任があることを発見した。(略)この地区を現在の無知な状態から以前の輝かしい状態に復興させ、近代西洋のやり方を以って東洋に教化を施す(東洋自身の利益のために)」(同前掲、引用者訳)と説明した。

日本式オリエンタリズムがほぼ定着した大正時代に活躍した東京帝国大学英文科出身の芥川が、西洋文化や思想の勉強を通し、このようなオリエンタリズムの二元対立的な思考様式を持つようになったのは無理もないだろう。同時に中国古典文化に親しんだ芥川は、「昔の支那の偉大」と「今の支那の偉大」を観察するために、中国旅行を始めた。結局、彼は「今の支那」に、中国人の貧困、不潔と中国の遅れた光景ばかりを発見した。例えば、不潔で「皆怪しげな人相をしている」車屋、「悠々と池に小便していた」一人の中国人、上海城

内の敷石から漂う尿臭、蝙蝠の糞で臭かった蘇州の文廟、鎮江の「頗る原始的貧民窟」、みすばらしい揚州の町並み、「往来に死刑の行われる町、チフスやマラリアの流行する町」である長沙、「大きい街頭の柳の枝に辮髪が二すじぶら下がっている」鄭州などの辛辣で皮肉のあふれる描写から、芥川のオリエンタリズムのまなざしや中国蔑視が顕著に現れている。一方、芥川は漢詩文や南画の中の理想な中国像を基準として、彼のエキゾチシズムやロマンチシズムを汚す近代中国の「俗悪な」西洋化を批判した。彼は上海を「支那第一の『悪の都会』」、「蛮市」、「場違い」の西洋とみなし、「西湖の俗化は益盛になる」という傾向を見出し、「煙籠寒水月籠沙」のような風景はないため、秦淮を「俗臭紛紛たる柳橋」と目した。また、古揚州を流れる川に「青山隱隱水迢迢」の趣が見られないため、潯陽江に「楓葉荻花秋瑟瑟などと云う、洒落た趣は何処にもない」ため、芥川は失望した。こうして、旅行中感じた失望、不満、反感、憎悪は、「現代の支那に何があるのか？政治、学問、経済、芸術、悉墮落しているではないか？」という猛烈な批判へと増大していった。この猛烈な批判について、王晓平は「芥川の痛罵は、当時の中国文化の趨勢を丁寧に了解した上でのものではない。彼は、先進国の記者が遅れた国を見るまなざしで、中国の現実を眺めたに過ぎない④」（『梅紅櫻粉——日本作家与中国文化』、宁夏人民出版社、2002年8月初版）と鋭く見抜いた。ここで注意すべきのは、これが西洋と近代化した日本との政治、学問、経済、芸術を基準として下した判断であるということである。旅行中の芥川は常にこの基準を持って歩いた。例えば、彼は蘇州が日本の松江に似ているため、蘇州が好きになった。芥川は確かに、「遅れた」中国を見下ろす視線と日本優越論のような意識を持っていたが、「東アジアの盟主」たる日本が近代中国を「以前の輝かしい状態に復興させ」という日本使命感は持っていなかったと思われる。ところが、その後の中国古典文学に親しんだ知識人の言説に、日本使命論がよく現れるようになる。例えば、佐藤春夫や吉川幸次郎などの文人学者はみな、中国を「復興」させるのは日本の責任であると思い込んでいた。

ここでは、特に西山康一「『幻想』『迷信』としての＜中国＞——芥川『南京の基督』における＜科学＞と＜帝国主義＞」（『文学』、岩波書店、2002年5、6月号）を紹介したい。私が知っている限り、現在では、ポストコロニアリズム

やオリエンタリズムなどによって、芥川作品を分析する論文は未だに少ないから、この論文は特筆に値すると思われる。西山氏は意識されない文化の差、＜宗教＞と催眠術、＜科学＞が＜帝国主義＞と結びつく時といった面から綿密に分析し、無頼な混血児をキリストと思っている金花のキリスト信仰の浅薄性や迷信性、あるいは他人に伝染することによって自分の梅毒が治ると思う山茶の衛生学的知識の欠如も含めた南京私窩子全体の迷信性を訴え、場合によってはその「蒙を啓」こうとする語り手や日本旅行家の見解、態度をそこに見出した。その上、『支那語』が覚束ない語り手の言葉から浮き彫りにされる日本の旅行家の金花に対する見解の恣意性、あるいはそれにもかかわらず、中国について知ろうとしつつも結局自らの優位性を前提として相手を見る——本来錯綜的なはずの中国という＜他者＞に対し、自己と同等のアイデンティティの存在を見出さず、結果的に大陸進出を正当化するような自らの見解の正しさを、疑うこともなく押し付ける——＜帝国主義＞の恣意性、自己中心性ともいえないだろうか」という結論を出している。また、再び来た日本の旅行家の胸中の眩き、つまり、「おれは一体この女の為に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも黙って永久に、昔の西洋の伝統のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」という言葉から見れば、金花を迷信的な、未開な人物と見なして啓蒙しようと思う彼の態度のほかに、金花を「西洋の伝統のやうな夢」、すなわちキリスト教から救おうとするという名目で、西洋列強と＜科学＞という知的面でも、覇権を争おうとする彼の野心も表に出てくる。これらの論点は、いずれも新鮮で且つ説得力があり、芥川作品に潜むオリエンタリズムの、帝国主義的な要素を明らかにさせ、従来の研究と一線を画していると言えよう。この論文は、ポストコロニアリズム、オリエンタリズムによる芥川研究の可能性と必要性を訴える一つの好例として、特別の意味を持っていると考えられる。

4、2 受容美学と比較文学の視点から

ここでは受容美学と比較文学の視点から、芥川の中国古典についての理解と芥川文学の中の中国像の分析を試みる。周知のように、H・R・ヤウス(H・R・Jauss)の受容美学はH・G・ガダマーの解釈学によるところが大きいから、まずガダマーの文学解釈学理論を簡単に紹介してみたい。ガダマーは特に理解の歴史性を

強調している。歴史性が人類生存の基本的な事実であり、理解の主体としての人間と理解の対象とはみな歴史の中に存在しているから、人間のテキストに対する理解も歴史的なものである。理解の歴史性は人間の先入観 (Vorurteil) を構成している。言い換えれば、テキストを理解する際、どの読者も空白のまま新しいテキストに入るわけではなく、M・ハイデガー (Martin Heidegger) が述べた「前構造」を持っている。先入観は歴史と伝統のもとで成立し、人間が受けなければならない必然的な存在である。ガダマーは、われわれは先入観を取り除くわけではなく、何よりも合法的な先入観と誤っている先入観とを区分し、理解を促す合法的な先入観を拡大し、理解を妨げる誤っている先入観を避けるべきだと主張している。理解の主体と理解の対象とがそれぞれ違った地平を含んでいるから、テキストの理解活動の本質は異なる地平の融合にほかならない。ガダマーの言葉で言うと、「理解は実際のところ、常に独立自存していると間違えられる二つの地平の融合過程にほかならない。^{④⑦}」したがって、歴史や歴史テキストに対する理解は現在の地平と過去の地平との融合過程であり、古典文学へのどんな理解でも、例外なく現代の色彩を帯びている。ガダマーは『真理と方法』という本の中で、この点について次のように語っている。「伝統に関する研究において、この融合は絶えず現れている。そして、新しい地平と古い地平は絶えず生々しい価値に集まり、しかもこの両者のどちらも確実に除去されることはできない。^{④⑧}」

だから、文学解釈学の視座から芥川の中国認識を考察し、しかも中国を一つの大きな「テキスト」と見なしたら、複雑な近代中日関係史の状況に生きた芥川は、現実の中国を漢詩文の中の中国と理想化した誤った先入観を持ち、矛盾した中国認識を免れず、当時の日本の知識人の限界を示したのは、ある意味において、当然なことであろう。長い間、日本の知識人は中国文化に憧れ、中国古典に敬意を払った。芥川もその一人である。彼は幼いころから、中国古典文化を崇拝し、自ら進んで漢籍を読破し、盲目的に胸中に桃源郷のような理想的な中国像を築いた。言い換えれば、芥川は中国古典文化を理解、認識する際、激動する中国の現実や複雑な中日関係史に目を向けず、ひたすら漢詩文や南画の世界に耽溺し、現在の地平と過去の地平とを融合させようと努力しなかったために、現実の中国に漢詩文の中の中国像を見出せないため、近代中国を蔑視、

嘲罵するようになった。これは、芥川が現在の地平と過去の地平とを融合させず、一方的に現在の地平を取り除いたせいであろう。先入観について、芥川自身にもある程度地了解があるようである。吉田精一は『『秋山図』について』（『芥川龍之介 II』、同前掲）の中で、こう分析した。「芥川によれば、芸術は結局鑑賞者と創作者との共同制作である。成心なくして受け得た芸術の第一印象と、あらかじめ成心をもって対したそれとは、まったく別物と思われるほどの相違があり得る。理想的な芸術の像は、鑑賞者の想像においてのみ存在し得る。むしろ想像の内において、現実はいっそう美化され、理想化されるために、実際実物に接するのち失望を味わう。——大体こういった芸術観乃至人生観を彼は『記秋山図始末』の中に発現したといえよう。」

ヤウスはガダマーの先入観と地平の融合という概念を継承した上で、それらを期待の地平へと発展させ、受容美学という真新しい分野を切り開いた。受容美学は、以前の作家を中心とする実証的な文学批評と、テクストを中心とする形式主義的文学批評と異なり、読者の審美受容と美的経験を重んじる新しいパラダイムの文学研究であり、20世紀70年代の初めに西ドイツで生まれた文芸思潮である。期待の地平と美的距離を重視することは受容美学の特徴である。期待の地平は、既成の美的経験に基づいた狭い文学的期待の地平と以前の生活経験に基づいたより広い生活的期待の地平からなっている。具体的に言えば、期待の地平は読者の受けた教育、社会的地位と境遇、生活経験と人生経歴、読者の性格・気質と審美趣味、人生観と価値観から生まれるものである。だから、期待の地平が異なると、読者が求める読解の対象も同一ではない。ヤウスはテクストの読解の過程を読者の期待の地平が対象化する過程と見なしている。あるテクストが読者の期待の地平と合致すれば、直ちに読者の期待の地平を対象化させ、読解を素早く完了させる。もし合致できないと、つまり美的距離が生じる時、読者は熟知している経験への否定を通じ、あるいは新しい経験を意識の面まで向上させることによって、新しい期待の地平を作り出してはじめて、この作品を理解できるようになる。また、期待の地平には個人的それと公衆的それとの区別がある。公衆的期待の地平はある時代に支配的地位を占める共同的な期待の地平であり、隠蔽した形で個人的期待の地平の構成に影響を与え、また、ある時代における文学受容の深さと広さを決定している。

ヤウスの以上の理論から見れば、芥川は中国古典文学に親しみ、理想的な中国像を求めるといった公衆的期待の地平、また読書による人生の体験などの影響のもとで、独自の個人的期待の地平を形成した。それはどういうことであるか。佐伯修は「芥川龍之介が求めた中国」の中で、「それは漢詩文の世界、『訓読』された古典中国文学という文字の世界であり、書画や古典戯曲の世界だった」と分析した。芥川は現実の中国という大きな「テキスト」に出会ったとき、以前の期待の地平が現実の「テキスト」に一致できなく、美的距離が生じてきた。例えば、上海をはじめとする南方は芥川の期待の地平に合わず、「比較的支那的気分が薄かった」ため、芥川の反感や失望を招いた。北京をはじめとする北方は芥川の胸中にある理想的な中国像に一致し、「一般に静かで人間にしても落ち着きがあつて実に大陸的な気分が自然の裡に味われ」たため、彼の愛着と郷愁を喚起した。しかし、この時、芥川には、以前の期待の地平を放棄し、進んで現実の「テキスト」に合う新しい地平を作り出し、現実の中国を鑑賞、認識しようという姿勢が見られず、一途に古い期待の地平や胸中の理想的な中国像に固執し、現実の「テキスト」を拒否、蔑視し、結局現実の中国を理解できなかった。中国古典文化に憧れてきた芥川の現実の中国に対する幻滅の背後には、中国への期待過剰が感じられる。

次に、ガダマーの文学解釈学とヤウスの受容美学のほかに、王向遠《比较文学学科新论》（江西教育出版社、2002年6月）の「外国に関わる文学についての研究」という章を参考しながら、芥川文学における中国像、中国人像を分析してみたい。「外国に関わる文学」（涉外文学）という概念は形象学(imagologie)から生まれたにもかかわらず、内包と外延において形象学より大きいものであり、王向遠が自ら独創した概念でもある。これは、外国を舞台とし、外国人を対象とし、外国問題を題材とする作品を指す。芥川の中国物、「南京の基督」などのような中国を舞台とする現代小説、『支那遊記』はこれに該当できる。このような作品における中国像、中国人像を分析する際、まず、文化的先入観（あるいは定型の地平）、時間と空間による視差に注目しなければならない。どの作家もある特定の種族・時代・階級に属し、言わば特定の文化集団に属しているから、みな自分なりの文化的先入観、特にイデオロギーの傾向を持ち、自分の創作に多かれ少なかれ表れている。したがって、明治生まれの芥川は、当

時の日本の知識人が共有している「支那趣味」を持ちつつも、無論、日清戦争後ますます肥大化する中国蔑視も所有した。中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが混同している中国認識は、当時の日本の知識人の共通心理であった。また、「先進国」の小ブルジョア作家としての芥川が半植民半封建の近代中国に反感、蔑視を示したのも、ある意味において当然なことであろう。

このほかに、時間と空間による視差も重要な問題である。外国に関わる文学が外国を舞台、題材とする文学であるから、本国の作家と対象との間に時間的、空間的距離が現れるのは、どうしても避けられないことである。この距離は作家の異国異族に対する感情、態度や価値判断に影響を及ぼすことが考えられる。普通、この距離が大きければ大きいほど、異国についての描写には、写実性とイデオロギーの要素が弱くなり、主観性と美的要素が強くなる。作家は常にこの距離を利用し、自分の考え方を表すため、異国のイメージを主観的に描いたり、あるいはそのイメージを理想化し、ユートピア文学を創作したりしている。したがって、中国古典文化と芥川との間の距離が大きく、芥川との利害関係も少ないため、彼はそれに親しみ、敬意を払い、常にそれを作品に取り入れ、自分の桃源郷志向や「支那趣味」を表出した。これに反して、芥川は近代中国との距離が小さいため、作品にも近代中国への蔑視、歪曲、反感が頻出した。

時間と空間による視差に啓発され、私は芥川の中国認識に似ている長与善郎のそれを思い出した。竹内実の著作の中に、これについての言及があり、ここで引用しておきたい。「相当の程度において、今までの日本人はなお中国文化を懐かしむ文人趣味の信者に属している。中国は、かつて彼らが日本の現実を逃れる所であったが、彼らが自身の世界を批判する時の拠り所にもなった。

(略) 長与善郎も満鉄顧問(日本南満州鉄道株式会社)の特殊な身分をもって、何度も中国へ旅行に行ったが、中国文化の基本特徴が所謂『骨董文化』であるということを見つけた。そして、彼は日本人が骨董を恋するという趣味に耽溺する時、中国文化に対して、ゼロ距離の感受も持つようになった。(略) 長与は、中国文化の本質を骨董文化と規定したから、当時中国の現代青年たちが伝統文化を改革する熱意に共鳴できなかった。彼は中国旅行の際、こういう感受を持っていた。したがって、長与の中国文化に対するゼロ距離の感受は、同時に中国社会現実に対する無限大の距離を保つことにも現れた。この気持ちを中

国に興味を持つ日本人のあるタイプと見なしてもいい。」(原文ではないが、竹内実著、程麻译、《回忆与思考——竹内实文集 第一卷》から引用して訳した。)以上の記述に照らし、長与善郎と同時代の芥川もこのような中国認識や中国趣味を持っていたと言えよう。だから、このような矛盾した中国認識は、やはり当時の日本知識人における普遍的なものであったと思われる。

4、3 芸術至上主義の創作姿勢から

芸術至上主義とは何か。『日本国語大辞典』(小学館、昭和五十六年九月)には、「フランスの哲学者ビクトル・クーザンの唱えた *l'art pour l'art* (芸術のための芸術) の語に基づき、芸術に政治、哲学、宗教など他の文化領域の介入をゆるさず、また、効用その他の目的実現のための手段ともしない立場。表現技術の高度の洗練と、唯美的傾向をともしなう」とある。一体、芥川の創作姿勢はこれに該当するか。芥川は果たして芸術至上主義者であるか。彼の全作品と全生涯から見れば、答えはやはり肯定的なものである。「芸術家は何よりも作品の完成を期せねばならぬ。さもないと、芸術に奉仕する事が無意味になってしまうだらう。」(「文芸その他」)という発言から見ても、芸術の絶対性と完備性を主張する芥川の姿が浮上すると言えよう。「ぼんやりとした不安」という言葉を残した芥川の自殺について、三好行雄は「芥川の死とその時代」(『日本文学の近代と反近代』、東京大学出版会、1986年6月20日2刷)の中で、「おそらくその最大の不安はプロレタリア文学の圧迫感でもなければ、未知なあたらしい時代へのおそれでもなかっただろう」と述べ、芥川の死を芸術家としての行き詰まりによる文学的死と捉えた。「戯作三昧」と「地獄変」は芥川の芸術至上主義者としての姿をより徹底化したものと言えよう。「人生は一行のボオドレエルにも若かない」(「或阿呆の一生」)は、芥川の芸術至上主義を示すものとしてかなり有名である。しかし、芥川の芸術至上主義は異色なものであり、「芸術のための芸術」に同調しない。野寄勉は「芥川に芸術至上主義的傾向が著しいとはいえ、『芸術のための芸術』には不賛成という矛盾した姿が見られるのは、偏向した『人生のための芸術』ともいえる当時の自然主義文学に対抗する態度を自覚していたからである」(『芥川龍之介大事典』志村有弘編、勉誠出版、平成14年7月10日初版)と分析した。この点について、芥川自身

も「文芸その他」に、「芸術の為の芸術は、一步を転ずれば芸術遊戯説に堕ちる。人生の為の芸術は、一步転ずれば芸術功利説に堕ちる。」と鮮明に述べ、「芸術のための芸術」と「人生のための芸術」とに賛成できない姿勢を表明した。

そして、芸術至上主義者としての芥川は、どのように芸術と人生との関係を捉えていたか。三好行雄は「芥川龍之介の（そう呼びたければ呼んでもいい）芸術至上主義は、芸術か人生かという単純な二律背反の選択では決してなかった。芥川は人生を否定して芸術をえらんだのではなく、＜人生の残滓＞にたいして、＜人生＞をえらんだのである。」（『芥川龍之介』、筑摩書房、1976年）と分析した。つまり、芥川は、「人生は地獄よりも地獄的である」「我々人間の生活は（略）いつも暗澹としているはずである」（「侏儒の言葉」）「いかなる社会組織のもとにあっても、我々人間の苦しみは救いがたいものと信じている」（「文芸的な、余りにも文芸的な」）のように、人生を暗澹たるものと見なしていたにもかかわらず、「芸術のための芸術」を主張する耽美派のように、人生を否定するわけでもなければ、「人生のための芸術」を主張する流派のように、芸術より人生の優位性を唱えるわけでもない。韓小龍は《“为了艺术的人生”思想之形成轨迹——从〈戏作三昧〉到〈地狱变〉》（扬州大学学报、2004年第1期）という論文の中で、「戲作三昧」と「地獄変」を検証したのち、芸術と人生との関係を「芸術のための人生」と説いた。「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに」といった仙人の言葉や、「黄梁夢」のなかの盧生の「夢だから、猶生きたいのです。（略）私は真に生きたと云へる程生きたいのです」といった言葉から分かるのは、芥川が暗澹たる人生、醜悪な現実に立ち向かって、人生を否定しようと思わなかったということである。彼はあくまでも、芸術を通じて人生を体験し、つまり、読書による人生体験であり、また、芸術の創作を通じて人生の認識を深くしようと努めていた。芸術は彼にとって、魂の救いの場であるにほかならなかった。

芥川は人生を否定しないにもかかわらず、生々しい現実を通じて人生を知ろうとしなかった。現実には彼にとって無意味のものであり、彼は現実に関心でなかった。第一章に述べたように、明治末期から大正時代にかけての間は日本近

代史上、激動する時期であった。日本は日清戦争と日露戦争に勝ち、西洋列強の仲間入りを遂げた。戦争の勝利と巨大な戦争賠償金は日本資本主義の発展を促し、経済と産業における著しい変化を招いたが、と同時に、さまざまな社会問題をももたらした。第一次世界大戦の際、日本も参戦し、ドイツの山東における権益を奪い取った。大戦が終わった後、世界規模の経済恐慌も日本に広がった。この一連の現実ほとんど芥川の作品に姿を現していない。前期の歴史小説は言うまでもなく、後期の私小説的作品にもほとんど投影していない。『支那遊記』にも、中国各地に割拠する軍閥の勢力争いや、列強の中国進出など極めて不安定な社会情勢はほとんど姿を隠している。

芥川は「あらゆるものを本の中に学んだ」。「彼は人生を知る為に街頭の行人を眺めなかった。寧ろ行人を知る為に本の中の人生を知らうとした。(略) 彼等の愛を、彼等の虚栄心を知る為には本を読むより外はなかった」(「大導寺信輔の半生」といった芥川の自叙は、彼の読書による人生体験、現実に対する無関心を明らかにしている。彼は理知によって現実を再構築しようとし、直接に現実を作品に取り入れるわけではなく、歴史小説というジャンルを選んだ。王向遠は《鲁迅与芥川龙之介、菊池宽历史小说创作比较论》(鲁迅研究月刊、1995年第12期)のなかで、鲁迅と芥川の歴史小説との間に、現実性対超現実性、具体性対抽象性という対立した構図を見抜いた。つまり、鲁迅の「古代の事実を取り、新しい生命を注ぎ込むことで、現実との関係が生じてくる」という姿勢に対して、芥川の姿勢は、「古代の事実を取り、新しい生命を注ぎ込むことで、現代人との関係が生じてくる」(鲁迅「羅生門」の「訳者付記」というものであろう。芸術至上主義者としての芥川は、芸術の完備への追求を創作の絶対的価値と見なし、「そのテーマを芸術的に最も力強く表現する為に」(「昔」大正七年一月)、歴史小説というジャンルを選び、鲁迅ほど現実への関心を持たなかった。また、「鲁迅の歴史小説の大部分は当時の具体的な社会問題に密接に関わるに対して、芥川の歴史小説は、超現実の中にある種の時代と民族を超越する、全人類の共通する抽象的な意味と普遍的な主題を追求しようと努めている。」(王向遠、同前掲)だから、江口渙は、「芥川君の作品の基調をなすものは澄み切った理知(インテレクト)と洗練(リファイン)されたヒューモアである。そして、作者は何時も生活(ライフ)の外側に立って静かに

渦巻を眺めてゐる」と述べ、芥川を知的な人生の傍観者と規定した。菊池寛も「人生を銀のピンセットで弄んでゐる」という有名な批評を与えた。一方、自然主義作家からは猛反発が起こり、たとえば、「直接に自分の心をもって現実にぶつかって行かない」（大正六年四月六日『読売新聞』）とか、「彼の作品からは、大きな気魄も、深沈な心も見出すことが出来ません。彼の作品の唯一の興味は、無限大の人生から、一片の出来事を切り取ってきて、それをいかに巧みに画面化するかといふに過ぎない」（細田源吉「好事的傾向を排す」）とか、芥川作品に現実とあいわたるところがないというこうした批判は、彼に対する同時代の批評の有力な一面を表していた。^{④⑨}

激動する中国の現実状況への関心が薄く、その観察の目が中国の現実を捉えることが出来なかったといった『支那遊記』に対する否定的評価が示しているように、芥川は確かに生の中国の現実を無視し、中国の著名な政治家との会見にも深い関心を抱かなかった。例えば、「上海遊記」の「鄭孝胥」の章に、「尤もこの逆上の原因は、私の軽薄な根性の外にも、確かに現代の支那その物が、一半の責を負うべきものである。もし嘘だと思ったら、誰でも支那へ行って見るが好い。必ず一ヶ月という内には、妙に政治を論じたい気がしてくる。（略）誰も頼まないのに、芸術なぞより数段下等な政治の事ばかり考えていた」という一節があり、また横光利一の「芥川龍之介は上海へ行くと政治のことばかりに頭が廻って困ると私にこぼしたことがある。^{⑤⑩}」（「北京と巴里」『改造』昭和十四年一月）という証言も加えて考えると、政治そのものへの反感と混沌とした中国の現実への無関心が読み取れる。「李人傑」の章にも、「予は支那の芸術に失望したり。予が眼に入る小説絵画、ともにいまだ談ずるに足らず」といったような近代中国の芸術への失望のほかに、「君に問う、プロパガンダの手段以外に、芸術を考慮する余裕ありやと。李氏言う。なきに近しと」という一節から、芸術の政治宣伝の手段化に対する芥川の懸念と、政治からの独立性を主張する芥川の芸術至上主義的姿勢がうかがえる。一方、芥川は近代中国の現実への薄い関心の反面、本で知った漢詩文や書画によって構築された理想的な中国像、つまり、彼の精神の安息場、魂の救いの場としての桃源郷のような中国像を求めた。しかし、彼は、現実の中国から漢詩文の中の中国を発見できず、現実の中国が「俗界の延長」（神田由美子「芥川龍之介と中国」）にあるという

認識を得たとき、近代中国への蔑視も募った。だから、単援朝は「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実との間」（同前掲）の中に、芥川のこの矛盾した見方を「芥川は常に現実と自分の間に本の中の『支那』——『支那』の夢を介在させ、これを基準に現実を捉えずにはいられなかったので、夢想対現実の図式が避けられないものとなるのである。」と捉えた。北条常久も前掲した論文の中で「彼は芸術への接し方で、現実の中国を裁断してしまった。芥川にとっては、現実社会をも芸術を見る姿勢で考えるという思考の型ができあがってしまっていたのであろう。これでは現実には彼にとって何の意味も持たぬものであろう」と述べた。要するに、芸術至上主義者としての芥川は本の中の中国ばかりに注目し、現実の中国への関心が薄かったと言わざるを得ない。

5 おわりに

近代日本の知識人の中国認識、あるいは中国観についての研究は確かに多大な意味を持っていると言えよう。これは、日本社会のエリートとしての近代知識人の大部分は中国侵略戦争の提唱者、鼓吹者、推進者、擁護者であり、彼らの誤っていた中国認識によって、中日両国人民に多大な悪影響を与えた悲劇——日清戦争、十五年戦争が起こり、近代の複雑な中日関係や現在に至る両国の間の紛らわしい歴史問題をもたらしたからである。とりわけ、芥川における中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが混同しているという矛盾した中国認識についての研究は、より大きな意味を持っているはずである。これは、中国古典文学の芥川に与えた影響、芥川文学における位置を明瞭にさせるといった文学的意義のほかに、日清戦争から満州事変までの中日関係史上の変動期に生きた芥川という一人の文人の中国認識についての研究を通じ、この時期の日本の知識人の全体的中国認識及び一般国民の対心理を理解することに寄与できるといった歴史的意義も所有しているからにほかならない。

こういう認識の上に立ち、本稿は四章に分けて、芥川の矛盾した中国認識の位相及びその原因についての分析を試みた。第一章では、日清戦争、北清事変、日露戦争、二十一か条、五・四運動などの日本と緊密にかかわった芥川生涯中の中国社会の変遷や、当時の主導的な地位を占めた脱亜論の中国認識、興亜論（アジア主義）の中国認識、制覇論の中国認識といった中国認識の正体、この

三者の共通した中国蔑視論、日本優越論といった歴史背景を述べた上で、芥川の唯一の海外旅行——中国旅行の背景、中国旅行の足跡についての説明も加え、以上の歴史背景から生まれた中国蔑視と中国古典文化への親近から生まれた愛着とが混同していた芥川の矛盾な中国認識を引き出した。第二章では、まず、芥川の「支那趣味」から着手し、「あらゆるものを本の中に学んだ」芥川の読書歴を整理し、彼の書簡における漢詩文への評価、発言や、『聊齋志異』などの怪異談、雅号などへの偏好から、芥川の並々ならぬ中国古典文学への関心を明らかにし、さらに、中国書画、京劇、篆刻などの中国古代芸術への愛好、五種類に分類される芥川文学の中の中国像を総括し、芥川の中国古典における高い造詣と愛着を明らかにした。第三章では、まず、本稿では重大視される『支那遊記』の成立と内容——中国人の貧困、不潔と中国の遅れた光景や「俗悪」な西洋化への嫌悪、動きつつある中国の現実への無関心——などを主軸に据え、そこから、中国の現実への関心が薄く、興味本位に走る傾向は強いといった従来の否定的評価と巴金などの中国人の反発、批判を記し、また、「南京の基督」、「湖南の扇」などの作品の中の中国批判を追加し、芥川の近代中国の現実への蔑視や誤解、無関心を抽出した。この上に、漱石の『満韓ところどころ』の中の中国蔑視と関連させ、中国古典文化への愛着と近代中国の現実への蔑視とが交じっているという矛盾した中国認識は、芥川の個人的問題でもなければ、一時的な問題でもなく、明治末期から昭和にかけての日本の知識人の共通心理であることを示した。第四章では、主にサイードのオリエンタリズム、ヤウスの受容美学と王向遠の比較文学などの理論、芸術至上主義の創作姿勢といった視点から、芥川の全生涯を貫いた矛盾した中国認識の原因を探求してみた。

本稿を執筆する際、基本指針としての比較文学の視座を常に念頭に置いた。楽黛雲が《比较文学简明教程》（北京大学出版社、2003年8月）の中で指摘したように、比較文学は文学理論、文学史、文学批評と並んで、文学研究のひとつの重要な分野である。王向遠は《比较文学学科新论》（同前掲）のなかで、「比較文学は人類文学の共通的法則と民族的特色への追求を主旨とする文学研究である」（引用者訳）と主張し、比較文学のほかの文学研究に取って代われない独自の意味を示した。Henri・H・H・Remakの「比較文学は、一国文学と他国文学との、あるいは多国の文学の間の比較であり、文学と人類のほかの表現

分野との比較である⑥」という定義が示しているように、比較文学は民族、言語、文化、学科、国家を超越した文学関係を対象とする文学研究である。その主な研究方法には、フランス学派の影響研究、アメリカ学派の平行研究、中国学派の解釈研究、文学と人文社会科学、自然科学との学際研究（Interdisciplinary）がある。本稿では意識的に影響研究の手法を取った。それは、芥川が明らかに中国文学からの影響を受け、作品の中に常に中国や中国人を登場させ、中国や中国文学と密接な関連があった作家であるからにはほかならない。富田仁の「芥川文学は比較文学研究の宝庫である」（「芥川、比較文学の視点から」『国文学』33巻6号）という指摘のように、数多い芥川と西洋文学との研究にも、それよりはるかに少ない芥川と中国文学との比較にも、こういう影響研究はやはり主流を占めている。本稿の第二、三章では、芥川が、中国古典文学や現実の中国からどのように、どんな影響を受けたか、また、作品の中にどのようにその影響が表れていたかといった問題を詳しく論じた。

この影響研究のほかに、私もポストコロニアリズム、文学解釈学、受容美学などの比較文学理論と密接に関わる現代文化理論を援用し、芥川の矛盾した中国認識の原因を究明してみた。第四章では、ポストコロニアリズムの元祖と言われるサイードのオリエンタリズムを取り入れ、エキゾチシズムとしての芥川の「支那趣味」の正体と芥川の二元対立的思考様式についての分析をした上で、芥川は優位文化の立場から、西洋及び日本の文明を基準として、中国を「遅れた」国と見なし、日本が近代中国を「以前の輝かしい状態に復興させ」という日本使命論は主張しなかったものの、その一連の中国蔑視の発言からなる日本優越論が以後の中国侵略にある程度の理論的根拠を与えたということを明らかにし、本研究の歴史的意義を強調した。一方、ガダマーの文学解釈学やヤウスの受容美学を取り上げ、芥川が現実の中国を漢詩文の中の中国と理想化した、誤った先入観や期待の地平を持ち、矛盾した中国認識を所有したのは、ある意味では避けられないことであるということを認めつつも、現在の地平と過去の地平とを融合させなかったことや、以前の期待の地平が現実の中国という「テキスト」に合致しない時、新しい地平を作ることによって、現実の中国を認識しようと努力しなかったことを批判した。これらのほかに、第四章では、読書による人生体験を志した芥川が現実に対しては無関心であったという彼

の芸術至上主義の創作姿勢から、彼は中国の現実への関心が薄く、激動する近代中国の現実を捉えられなかったということを記した。

以上のように、私は、比較文学という視点を意識しながら、芥川の矛盾した中国認識の位相を説明すると同時に、オリエンタリズム、受容美学などの理論を援用し、この矛盾した中国認識の原因への究明をしようと努めたつもりである。にもかかわらず、資料の制限の上に、比較文学、オリエンタリズム、受容美学などの理論への未熟な理解もあり、本稿には不十分なところがまだまだ多いと思う。これから、私は、引き続いて先行研究や理論書を深く読み、この問題の解明のために、さらに努力していきたいと思っている。

注釈

- 1、引用者訳
- 2、1920年6月下旬から同年十月上旬まで、1927年7月
- 3、「佐藤に至ってはどうか、平素は清高を装い、中国の友人を以って自任して来たのである。この度の彼の仮面の暴露は、いったい娼婦の行為にも劣るものではないか。」伊藤虎丸など編、『近代文学における中国と日本』（汲古書院、昭和61年10月20日）から引用した。
- 4、王向远《芥川龙之介与中国现代文学——对一种奇特的接受现象的剖析》（国外文学、1998年第1期）から引用した。
- 5、これについての先行研究として挙げられるのは、関口安義「中国旅行——芥川龍之介の道程（9）——」（『都留文科大学研究紀要』第37集、1992年）、祝振媛「支那遊記」（『解釈と鑑賞』、1999年11月号）、吉岡由紀彦「芥川龍之介の眼に映じた中国——『支那遊記』・零れ落ちた体験」（芦谷信和など編『作家のアジア体験——近代日本文学の陰画』、世界思想社、1992年7月）などである。
- 6、馬関は下関の旧名である。
- 7、引用者訳
- 8、日本近代史研究会編、『講座日本歴史7・近代I』（東京大学出版会、1985年5月8日初版）から引用した。
- 9、1884年12月4日に、金玉均をはじめとする朝鮮開化派は、日本公使館の

- 後援のもとで蜂起し、日本軍とともに王宮を占領し、「日本軍を王宮に入らせる」という詔書を朝鮮国王に書かせ、5 日に開化派政府の成立を布告した。結局、清国軍が朝鮮政府の要請により、王宮に入り、政変が失敗に帰した。臧世俊《福泽谕吉的中国观》（日本学刊、1995 年第 1 期）から引用して訳した。
- 10、竹内好編集『現代日本思想大系 9・アジア主義』（筑摩書房、1963 年 8 月 10 日）から引用した。
- 11、戚其章《日本大亚细亚主义探析——兼与盛邦和先生商榷》（历史研究、2004 年第 3 期）から引用して訳した。
- 12、竹内好の前掲序文の P20 から引用した。
- 13、嚴紹湯の前掲論文から引用して訳した。
- 14、ぼくも支那へ行きたいんだが銀相場は上がってゐるし金はさらになし行きたい行きたいだけで暮らしてゐるその点で君などは羨ましいよ一体上海じゃ一月いくらで暮らせるだろう安ければ僕も一月位行ってゐたい。
- 15、小生は支那旅行をしない限り九月頃又書いても差し支へ無之候。
- 16、今度社命により急に支那見物に出かける事となりましたその為五月号の小説及び四月号の随筆はさし上げられまいと存じます。
- 17、谷崎の場合は、一回目は 1918 年 11 月上旬から同年 12 月末までであり、二回目は 1926 年 1 月のことである。佐藤の場合は、一回目は 1920 年 6 月下旬より同年 10 月上旬までであり、二回目は 1927 年 7 月のことである。
- 18、同前掲、引用者訳
- 19、任常毅「芥川と漢文学」（『日本学論叢 IV』、人民教育出版社、1993 年 8 月）から引用した。
- 20、関口安義『特派員芥川龍之介』（同前掲）から引用した。
- 21、任常毅「芥川と漢文学 その裏と表——芥川書簡をめぐって」（『日本学研究 8』、世界知識出版社、1999 年）から引用した。
- 22、関口安義『特派員芥川龍之介』（同前掲）による。
- 23、以上の二通の書簡は和田繁二郎「芥川龍之介と中国文学」（『国文学』、4 巻 5 号）から引用した。
- 24、葛巻義敏、『芥川龍之介未定稿集』、岩波書店、昭和 43 年 2 月

- 25、「羅生門」の「訳者付記」（1921年6月8日『晨报副刊』）による。青柳達雄「芥川龍之介と近代中国 序説」（『関東学園大学紀要』経済学部編、第16集）から引用した。
- 26、僕も倪雲林や惲南田の画集を君に見せたかったのだ。
- 27、三四日前晚翠軒へ参り八大山人や王石谷などの画の本を求めましたこんど御出での節おめにかけます八大山人は新しい人ですな明末清初頃の人です。
- 28、1921年6月24日付中原虎雄宛の絵葉書による。
- 29、飯倉照平「北京の芥川龍之介——胡適、魯迅とのかかわり」（『文学』岩波書店、昭和56年7月号）と単援朝「芥川龍之介と胡適——北京体験の側面——」（『言語と文芸』1991年8月号）に参照
- 30、関口安義、庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』（勉誠出版、平成12年6月1日初版）から引用した。
- 31、前掲した青柳達雄の論文から引用した。
- 32、前掲した和田繁二郎の論文から引用した。
- 33、于长敏《芥川龙之介与中国古典文学》（赵乐生编《中日文学比较研究》、吉林大学出版社、1990年8月）から引用して訳した。
- 34、『全集』第十二巻「小野八重三郎への手紙」による。
- 35、青柳達雄「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」（『言語と文芸』、1988年9月号）から引用した。
- 36、李人傑が李漢俊であることは既に青柳達雄の詳しい検証（「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」）によって明白になった。李人傑と会った場所が、二か月後に中国共産党の創立大会の会場になり、今の中国共産党成立記念館にもなっている。
- 37、以上の『支那遊記』についての引用は、すべて『上海遊記・江南遊記』（講談社、2001年10月10日第一刷）から取ったものである。
- 38、趙夢雲『上海・文学残像——日本人作家の光と影』（田畑書店、2000年5月30日）から引用した。
- 39、単援朝「同時代の中国における芥川龍之介『支那遊記』」（『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』、第6号、2001年12月）から引用した。
- 40、秦剛《现代中国文坛对芥川龙之介的介绍与接受》（王成、秦剛編、《日本文

- 学翻译论文集》、人民文学出版社、2004年2月）から引用した。
- 41、中島長文「芥川龍之介『支那遊記』補跋」（『滋賀大国文』、1982年20号）から引用した。
- 42、黄文明「夏目漱石の中国人認識」（『日本学論叢 VII』外語教学与研究出版社、1995年9月）による。
- 43、この節を書く際、泊功《近代日本文学家的“东方学”——以芥川龙之介为中心》（日本学论坛、2002年3、4期）武田悠一「まなざしの帝国主義——ロンドンの漱石と漱石の満州」（佐々木英昭編、『異文化への視線』、名古屋大学出版会、2001年4月30日初版三刷）から示唆を得た。
- 44、引用者訳
- 45、同前掲、引用者訳
- 46、引用者訳
- 47、朱立元主编《当代西方文艺理论》（华东师范大学出版社、1997年6月初版）から引用して訳した。
- 48、乐黛云等著《新编比较文学原理》（北京大学出版社、1998年8月初版）から引用して訳した。
- 49、以上の批評は三好行雄「芥川文学の肯定と否定——同時代の評価から——」（『国文学』11巻14号）から取ったものである。
- 50、前掲した『近代日本文学における中国像』から引用した。
- 51、孟昭毅著《比较文学通论》（南开大学出版社、2003年11月第1版）から引用して訳した。

参考文献

日本語単行本

- 1、野村浩一、『近代日本政治思想史 II』、有斐閣、昭和47年2月20日、初版3刷
- 2、伊藤虎丸など編、『近代文学における中国と日本』、汲古書院、昭和61年10月20日
- 3、北条常久、「芥川龍之介と中国」、『日本文芸論叢』、笠間書院、1976年
- 4、田中美知太郎編、『思想の歴史 12・二十世紀アジアの展開』、平凡社、昭和41年3月25日初版
- 5、芦谷信和など編、『作家のアジア体験——近代日本文学の陰画』、世界思想社、1992年7月
- 6、竹内好編、『現代日本思想大系 9・アジア主義』、筑摩書房、1963年8月10日

- 7、葛巻義敏、『芥川龍之介未定稿集』、岩波書店、昭和43年2月
- 8、関口安義、庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』、勉誠出版、平成12年6月1日初版
- 9、日本近代史研究会編、『講座日本歴史7・近代Ⅰ』、東京大学出版会、1985年5月8日初版
- 10、中島嶺雄編著、『近現代史のなかの日本と中国』、東京書籍、1992年11月8日第一刷
- 11、関口安義、『特派員芥川龍之介——中国でなにを視たのか——』、毎日新聞社、1997年2月10日第一刷
- 12、鷺只雄、『年表作家読本・芥川龍之介』、河出書房新社、1992年6月20日初版
- 13、芥川龍之介著、『芥川龍之介全集』、岩波書店 1977年
- 14、勝倉寿一著、『芥川龍之介の歴史小説』、教育出版センター、昭和58年6月10日
- 15、森本修、『人間 芥川龍之介』三弥井書店、昭和56年5月29日初版
- 16、下島勲、『芥川龍之介の回想』、近代作家研究叢書91、日本図書センター
- 17、吉田精一、『芥川龍之介Ⅱ』、桜楓社、昭和56年11月12日第一刷
- 18、宇野浩二、『芥川龍之介』、文芸春秋新社、1953年5月
- 19、三好行雄、『芥川龍之介論』、筑摩書房、1993年3月10日初版
- 20、村松定孝など編、『近代日本文学における中国像』、有斐閣選書、昭和50年10月
- 21、芥川龍之介、『上海遊記・江南遊記』、講談社、2001年10月10日第一刷
- 22、趙夢雲、『上海・文学残像——日本人作家の光と影』、田畑書店、2000年5月30日
- 23、吉田精一、『芥川龍之介』、三省堂、1942年12月
- 24、菊池弘、久保田芳太郎、関口安義編、『芥川研究事典』、明治書院、1985年12月
- 25、祖父江昭二、『近代日本文学への射程——その視角と基盤と——』、未来社、1998年9月20日第一刷
- 26、松沢信佑、『新時代の芥川龍之介』、洋々社、1999年11月26日
- 27、佐々木英昭編、『異文化への視線』、名古屋大学出版会、2001年4月30日初版三刷
- 28、三好行雄、『日本文学の近代と反近代』、東京大学出版会、1986年6月20日2刷
- 29、志村有弘編、『芥川龍之介大事典』、勉誠出版、平成14年7月10日初版
- 30、三好行雄、『芥川龍之介』、筑摩書房、1976年
- 31、佐藤泰正編、『芥川龍之介を読む』、笠間書院、2003年5月31日初版
- 32、「一冊の講座」編集部、『一冊の講座・芥川龍之介』、有精堂、昭和57年7月10日初版
- 33、笠井秋生、『芥川龍之介作品研究』、双文社、1993年5月28日
- 34、佐藤嗣男、『芥川龍之介——その文学の地下水を探る』、桜楓社、2001年3月初版
- 35、宮坂覚編、『芥川龍之介作品論集成——別巻・芥川文学の周辺』、翰林書房、2001年3月20日初版
- 36、吉田精一、『芥川龍之介Ⅰ』、桜楓社、昭和54年11月12日一刷
- 37、唐則銘、『日本歴史』、外語教学与研究出版社、1992年7月初版
- 38、芥川龍之介、『芥川龍之介集』、河出書房、昭和42年10月10日六版

日本語論文

- 1、関口安義、「中国旅行——芥川龍之介の道程（9）——」、『都留文科大学研究紀要』第37集、1992年
- 2、祝振媛、「支那遊記」『解釈と鑑賞』、1999年11月号
- 3、任常毅、「芥川と漢文学」、『日本学論叢Ⅳ』、人民教育出版社、1993年8月
- 4、任常毅、「芥川と漢文学 その裏と表——芥川書簡をめぐる——」、『日本学研究 8』、世

- 界知識出版社、1999 年
- 5、和田繁二郎、「芥川龍之介と中国文学」、『国文学』、4 卷 5 号
- 6、青柳達雄、「芥川龍之介と近代中国 序説」、『関東学園大学紀要』経済学部編、第 16 集
- 7、飯倉照平「北京の芥川龍之介——胡適、魯迅とのかかわり」、『文学』岩波書店、昭和 56 年 7 月号
- 8、単援朝、「芥川龍之介と胡適——北京体験の一側面——」、『言語と文芸』1991 年 8 月号
- 9、青柳達雄、「李人傑について——芥川龍之介『支那遊記』中の人物」、『言語と文芸』、1988 年 9 月号
- 10、邱雅芬、「芥川龍之介の中国旅行の背景」、『現代社会文化研究』、第 5 号
- 11、神田由美子、「芥川龍之介と中国」『目白近代文学』、1979 年 6 月号
- 12、井上洋子、「芥川龍之介の中国旅行と〈支那趣味〉の変容——（その一）中国到着まで——」、『福岡国際大学紀要』第 3 号 平成 12 年 2 月
- 13、単援朝、「芥川龍之介『支那遊記』の世界——夢想と現実との間」『国語と国文学』1991 年 9 月
- 14、山敷和男、「所蔵漢籍から何が分かるか」『国文学』1996 年 4 月号
- 15、施小煒、「芥川龍之介の観た京劇」、『文芸と批評』7 卷 8 号、1993 年 10 月
- 16、海老井英次、「芥川龍之介文学典拠一覧」、『国文学』37 卷 2 号
- 17、李愛順、「芥川龍之介の中国—仙人考—」、『広島大学教育学部紀要』第二部、第 48 号、1999 年
- 18、須田千里、「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』」、『光華日本文学』、1996 年 8 月
- 19、施小煒、「中国——芥川龍之介……来て見て書いた」、『解釈と鑑賞』別冊、平成 13 年 1 月
- 20、伊藤一彦、「中国と『支那』」、『中国研究月報』1995 年 3 月号
- 21、丸山昇、「中国文学に現れた日本像」、『日本文学』、11 卷 2 号
- 22、単援朝、「同時代の中国における芥川龍之介『支那遊記』」、『滋賀県立大学国際教育センター研究紀要』、第 6 号、2001 年 12 月
- 23、上原専祿、柳田泉、勝本清一郎、猪野健二、「〈座談会・近代日本文学史 13〉明治から大正へ」、『文学』、1961 年 9 月
- 24、内村剛介、「未熟と成熟——上目づかいの『支那遊記』——」『国文学』1977 年 5 月
- 25、和田博文、「芥川の上海体験」、『国文学』、2001 年 9 月
- 26、単援朝、「上海の芥川龍之介——共産党の代表者李人傑との接触——」『日本の文学第 8 集』、有精堂、1992 年 8 月
- 27、中島長文、「芥川龍之介『支那遊記』補跋」、『滋賀大國文』、1982 年 20 号
- 28、単援朝、「芥川龍之介『湖南の扇』の虚と実——魯迅の『薬』をも視野に入れて」、『日本研究』2002 年 2 月
- 29、崔明淑、「夏目漱石『満韓ところどころ』——明治知識人の限界と『朝鮮・中国人』像」『解釈と鑑賞』、1997 年 12 月号
- 30、黄文明、「夏目漱石の中国人認識」、『日本学論叢 VII』外語教学与研究出版社、1995 年 9 月
- 31、西山康一、「『幻想』『迷信』としての〈中国〉——芥川『南京の基督』における〈科学〉と〈帝国主義〉」、『文学』、岩波書店、2002 年 5、6 月号

- 32、三好行雄「芥川文学の肯定と否定——同時代の評価から——」、『国文学』11 卷 14 号
- 33、富田仁、「芥川、比較文学の視点から」、『国文学』33 卷 6 号
- 34、杉本優、「『秋山図』—美の超越性と＜所有＞をめぐる」、『解釈と鑑賞』、1999 年 11 月
- 35、神田由美子、「芥川龍之介『湖南の扇』」、『解釈と鑑賞』、1997 年 12 月号
- 36、吉岡由紀彦、「上海遊記」、『解釈と鑑賞』別冊、平成 13 年 1 月号
- 37、関口安義、「芥川龍之介 人と作品」、『解釈と鑑賞』、1993 年 11 月号
- 38、宮坂覚、「芥川龍之介研究文献目録」、『解釈と鑑賞』、1999 年 11 月号
- 39、宮坂覚、「芥川龍之介全小説要覧」、『国文学』、1996 年 4 月号
- 40、掲侠「夏目漱石の中国認識」『日本学論叢 II』、外語教学与研究出版社、1991 年 12 月

中国語単行本

- 1、王向远、《笔部队和侵华战争》、北京师范大学出版社、1999 年 7 月初版
- 2、陈秀武著《日本人正时期政治思潮与知识分子研究》、中国社会科学出版社、2004 年 4 月初版
- 3、赵乐生编、《中日文学比较研究》、吉林大学出版社、1990 年 8 月
- 4、王成、秦刚编、《日本文学翻译论文集》、人民文学出版社、2004 年 2 月
- 5、赛义德著、王宇根译、《东方学》、北京三联书店、1999 年
- 6、王晓平、《梅红樱粉——日本作家与中国文化》、宁夏人民出版社、2002 年 8 月初版
- 7、朱立元主编、《当代西方文艺理论》、华东师范大学出版社、1997 年 6 月初版
- 8、乐黛云等著、《新编比较文学原理》、北京大学出版社、1998 年 8 月初版
- 9、王向远、《比较文学学科新论》、江西教育出版社、2002 年 6 月
- 10、乐黛云、《比较文学简明教程》、北京大学出版社、2003 年 8 月
- 11、孟昭毅著、《比较文学通论》、南开大学出版社、2003 年 11 月第 1 版
- 12、尾藤正英著、王家华译、《日中文化比较论》、浙江人民出版社、1992 年 2 月
- 13、饶芃子、王琢编、《中日比较文学研究资料汇编》、中国美术学院出版社、2002 年 3 月
- 14、王晓秋、《近代中日关系史研究》、中国社会科学出版社、1997 年 6 月
- 15、王晓平、《近代中日文学交流史稿》、湖南文艺出版社、1987 年 12 月
- 16、胡经之、王岳川编、《文艺学美学方法论》、北京大学出版社、1994 年 10 月
- 17、叶渭渠、《日本文学思潮史》、经济日报出版社、1997 年 3 月一版
- 18、叶渭渠、唐月梅、《20 世纪日本文学史》、青岛出版社、2004 年 1 月二版
- 19、叶渭渠编、《芥川龙之介作品集（小说卷、散文卷）》、中国世界语出版社、1998 年 8 月
- 20、王向远、《东方各国文学在中国》、江西教育出版社、2001 年 10 月一版
- 21、王向远编、《中国比较文学论文索引（1980—2000）》江西教育出版社、2002 年 2 月
- 22、竹内实著、程麻译、《回忆与思考——竹内实文集 第一卷》、中国文联出版社、2002 年 1 月

中国語論文

- 1、王向远、《芥川龙之介与中国现代文学——对一种奇特的接受现象的剖析》、国外文学、1998 年第 1 期
- 2、陆耀东、《昭和前期日本文学在中国》、鄂州大学学报、1998 年第 4 期
- 3、李秀卿、《想象中国古典 抒写人生理想——论芥川龙之介的中国题材作品群》、西昌师范

- 专科学校学报、2004 年第 2 期
- 4、孟庆枢、《芥川龙之介与中国文学》、东北师范大学学报、1996 年第 1 期
 - 5、严绍汤、《二十世纪日本人的中国观》、岱宗学刊、1999 年第 2 期
 - 6、臧世俊、《福泽谕吉的中国观》、日本学刊、1995 年第 1 期
 - 7、戚其章、《日本大亚细亚主义探析——兼与盛邦和先生商榷》、历史研究、2004 年第 3 期
 - 8、高洁、《芥川龙之介与〈聊斋志异〉》、日语学习与研究、2002 年第 1 期
 - 9、徐静波、《村松梢风的中国游历和中国观研究——兼论同时期日本文人的中国观》、日本学论坛、2001 年第 2 期
 - 10、丁丁、《芥川龙之介的中国堕落观》、新时代第 3 卷新年号、1933 年 1 月
 - 11、泊功、《近代日本文学家的“东方学”——以芥川龙之介为中心》、日本学论坛、2002 年 3、4 期
 - 12、张法、《论后殖民理论》、教学与研究、1999 年第 1 期
 - 13、韩小龙、《“为了艺术的人生”思想之形成轨迹——从〈戏作三昧〉到〈地狱变〉》、扬州大学学报、2004 年第 1 期
 - 14、王向远、《鲁迅与芥川龙之介、菊池宽历史小说创作比较论》、鲁迅研究月刊、1995 年第 12 期
 - 15、郭艳萍、《芥川龙之介与〈聊斋志异〉》、日本学论坛、2000 年第 3 期
 - 16、谷川绢、《芥川的〈仙人〉与〈聊斋志异〉》、长沙大学学报、1999 年第 1 期
 - 17、邱雅芬、《中国文人画对日本作家芥川龙之介创作的影响》、中山大学学报论丛、1999 年第 5 期
 - 18、许宗元、《芥川龙之介〈中国游记〉的文化解读》、北京第二外国语学院学报、2002 年第 4 期
 - 19、林岚、吴静、《近代中国文化人对一个日本作家的影响——评芥川龙之介的小说〈桃太郎〉》、东北师范大学学报、1998 年第 6 期
 - 20、邱雅芬、《章炳麟对日本作家芥川龙之介创作之影响》、中山大学学报、1999 年第 1 期
 - 21、刘春英、《芥川龙之介在中国》、唐都学刊、2003 年第 3 期
 - 22、李春红、《芥川龙之介历史小说的现代意识》、日本研究、2004 年第 1 期
 - 23、高增杰、《福则谕吉与近代日本人的中国观》、日本学刊、1993 年第 1 期
 - 24、班伟、《明治启蒙思想家的中国论》、安徽师范大学学报、2001 年第 5 期
 - 25、盛邦和、《19 世纪与 20 世纪之交的日本亚洲主义》、历史研究、2000 年第 3 期
 - 26、杨建平、《文化误读与审美》、文艺评论、1996 年第 1 期
 - 27、叶成林、《中江兆民与其中国文化观》、日本学刊、2000 年第 2 期
 - 28、老荷、《谈谈日本的中国文化接受》、中国比较文学、1999 年第 4 期
 - 29、王向远、《中日现代文学比较研究的宏观思考》、北京师范大学学报、1997 年第 1 期
 - 30、徐志啸、《近代中日文学的影响与交流》、中州学刊、1999 年第 4 期
 - 31、马红旗、《后殖民主义文学批评的对象》、四川外语学院学报、2003 年第 6 期
 - 32、王宁、《后殖民主义理论思潮概观》、外国文学、1995 年第 5 期
 - 33、从郁、《文学与霸权主义——萨伊德的文学的文化政治观照》、徐州师范学院学报、1995 年第 1 期
 - 34、黎跃进、《后殖民理论及其意义》、湘潭大学学报、2002 年第 5 期